

## 大先生と古事記の営み

2015 年 7 月 17 日

### 古事記 現代語訳 古事記 (1)

國學院大學教授を務められた国文学者の武田祐吉（1886－1958）が訳者で、昭和 31 年（1956）5 月に角川書店から角川文庫として出版されました。本のタイトルは『古事記』で、副題が『現代語訳 古事記』になっています。訳者は國學院大學 130 年史（<http://kokugakuin-univ.jp/history/>）に掲載されているような方で、本居宣長の『古事記傳（古事記伝）』の写本「眞福寺本」から忠実に現代語に訳されています。130 年史には「『万葉集』や『古事記』の研究、上代歌文の注釈的研究に優れ）昭和 25 年に『万葉集校訂の研究』で日本学士院賞を受賞。その文献学的方法に基づく堅実な研究は、万葉集および上代文学研究の発展に多大な寄与をなした」と紹介されています。

この本は、既に著作権が切れていて、「青空文庫」（[http://www.aozora.gr.jp/cards/001518/files/51732\\_44768.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001518/files/51732_44768.html)）で公開されています。また、Amazon の kindle でも無料公開されています。kindle は PC、スマートフォン及びタブレット端末でダウンロードできますので、ダウンロードして『古事記』を開いてみて下さい。

大先生が、「合気道は古事記一巻を体をもって現すものじゃよ」（『氣マガジン』1994 年 11 月号）とおっしゃられていたとこのことですので、この第一巻（原本は上巻、上つ巻と読む、この訳本では上の巻。神代の巻ともいう）と『武産合氣』『合気神髓』及び合気道の技の理合や理念と関連付けて読み進めたいと思います。

ちなみに第二巻は中巻、第三巻は下巻で、『古事記』はこの三巻からなっています。

『古事記傳』（眞福寺本、愛知県眞福寺宝生院〔通称：大須観音〕蔵）は、写真が <http://blogs.yahoo.co.jp/sw21akira/53930501.html> に掲載されています。国立国会図書館の近代デジタルライブラリー（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920805>）で、『校訂 古事記傳 乾（の巻）』（本居宣長の義理の曾孫 本居豊穎 校訂、本居家 5 代 本居清造 再訂）が読めますので、解釈を知りたいときや原文に遡るときに参考にしたいと思います。読み下し文は『日本神典 かな古事記』（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/906437/32>）が参考になると思います。

また、ネット上に紀伝体の古事記全文（原文）が掲載されていて（[http://www.seisaku.bz/kojiki\\_index.html](http://www.seisaku.bz/kojiki_index.html)）、検索も出来るようになっています。

この上巻にはたくさんの神々が出てきます。これらの神名については「古事記の系譜／神代」（[http://j-myth.info/memo/kojiki\\_ge\\_kami.html](http://j-myth.info/memo/kojiki_ge_kami.html)）に良くまとめられています。『武産合氣』と『合気神髓』には、これらの一部の神名しか出ていませんが、そのほとんどが「このことはすべて猿田毘古の大神のお導きにして、昭和 17 年 12 月 16 日、午前 2 時より 3 時の間、日本中の神々が現れて合気の出現を寿ぎたまう。大和魂の錬成、松竹梅の剣法、天地合体して両刃の剣、精神の発動によって世の濁りを洗う。それには第一にこの大東亜戦争を止めさせねばなりません。あまりにいうことが大きいのではじめお受けしかねましたが、各地からいうてくるので御神意により、岩間に 36 畳敷きの合気神社を建てました」（『合気神髓』pp.129-130）と話されている合気道の創出に関連する神々（註：合気神社に祀られている 43 柱の神々と推測）であると思いますので、その都度触れて行きたいと思います。

この本の「上の巻」の目次は次のとおりです。

序文

過去の時代（序文の第一段）

古事記の企畫（序文の第二段）

古事記の成立（序文の第三段）

一、イザナギの命とイザナミの命

天地のはじめ

島々の生成

神々の生成

黄泉の國

身禊

二、天照らす大神とスサノヲの命

誓約

天の岩戸

三、スサノヲの命

穀物の種

八俣の大蛇

系譜（スサノヲの命の系譜）

四、大國主の命

兎と鰐

赤貝姫と蛤貝姫

根の堅州國

ヤチホコの神の歌物語

系譜（出雲系の系譜）

スクナビコナの神

御諸山の神

大年の神の系譜

五、天照らす大神と大國主の命

天若日子

國讓り

六、ニニギの命

天降

猿女の君

木の花の咲くや姫

七、ヒコホホデミの命

海幸と山幸

トヨタマ姫

『古事記』については偽書説もありますが、大先生が「これが宗教の奥義であると知り、武道の奥義も宗教（註 宇宙の真理）と一つなのであると知って法悦の涙にむせんで泣いた」（『武産合氣』 p.131）とおっしゃられている「宗教の奥義・武道の奥義」が述べられているという観点から読みたいと思います。

大先生は、合気道そのもの（武道の奥義）に立脚して宗教の教え（古事記の言霊解：布斗麻邇言霊『古事記』）で説明されています。「私の武産の合気は、宗教から出て来たのかということそうではない。（宇宙の真理に基づいた）真の武産から宗教を照らすのです。未完の宗教を完成へと導く案内であります」（『武産合氣』p.192）とおっしゃられている言葉からその立脚点が分かります。そのため、合気道の稽古を続けている人は、『古事記』を読んで、「ああ、このことか」と肯くところがあるはずです。

このホームページの「合気道開祖の教え」に「合気道の霊的・精神的系譜」を載せていますが、中村孝道（こうどう、たかみち）→望月幸智→大石凝真素美→出口王仁三郎へと伝えられた言霊 75 声による解が大先生の言霊解であろうと思います。これは、「五十音に濁音を加へたる七十五音の表を『ますかがみ（一名ますみかがみ）』といひ、各音の『みたま』をしるしたるを『ことたま』と云ふ、…按ずるに『ことたま』といふことを称ふる一派の音義説は、これにもとづきたると、五十音図とありて同じからず。この『ことたまますかがみ』の説は、其起源詳ならず、或は日向の老人某より、参河国崇福寺僧大周に伝へたりといひ、或は京都の医師、野山千秋、其祖父元成より受けたるものといふ。之を世に広めたるは、中村孝道といひし京都の人にて、晩年江戸に來りて之を称へ、一時世に行はる。其著、言霊或問あり」（『国書解題』の「ことたまますかがみ」の項）とあるとおり、言霊学の主流である 50 音によるものとは異なっていますので、『霊界物語』や大石凝真素美の書物、中村孝道の書物に遡らなければなりません。

大先生は、『古事記』を「神典」「極典」と表現されていますが、大石凝真素美などの書物にある言葉です。

序文から読む前に、八千代合気会の会員は、「青空文庫」などを開いてこの本が読めるような準備をお願いします。

2015 年 8 月 3 日

## 古事記 現代語譯 古事記 (2)

合気道から『古事記』を眺めると、次の「奥深いもの」と言われているところがきっと分かるようになってくると思います。

「講演をなさる時、普通の学者が理論的、科学的に話をするのところがって、大先生は断片的に話されるので、聞く人によってはひじょうに分かりにくいわけなのです。大先生の中には、常識では測りがたい奥深いものがあり、それをちょいちょい引っぱり出してお話になるので、最初のうち凡人にはさっぱり分かりません。しかし何度もお目にかかり、お話を素直にお聞きしているうちに、奥深いところから割り出されているのだという前提でお聞きすると、断片的なものが、自然につながっていくから不思議でした」（『合気道開祖 植芝盛平伝』pp.27-28）

大先生が、「合気道を学ぶものは古事記を学びなさい、なぜならば合気道は古事記の営み（実行）であるのだから」（山根政行著『へちまの葉』p.128、132）と勧められています、それは大先生の断片的な合気道の理合や奥義に関するお話が一つの体系として繋がって来るからだと思います。

大先生が『古事記』からお話をされる時には、国学 → 古神道（復古神道）・言霊学 → 教派神道（の一派、大本）という流れの中での解釈に従っておられます。この古神道は賀茂真淵（1697 – 1769）の復古国学まで遡ると平田篤胤（1776-1843）になって神道思想が強まったとか言われています。『古事記』が編纂された和銅 5 年(712)当時は陰陽説が融合した老荘思想の影響があったと思われますが、古神道や大本の教えが形作られる段階で、仏教、キリスト教（漢訳聖書）及び明治期以降には西洋の科学の

影響も受けています（註 古神道は儒教、仏教などの影響を受ける以前の日本民族固有の精神に立ち返ろうという思想というのが定説ですが）。即ち、古神道はムスビによる神人合一の道（神ながらの道）ですが、これにキリスト教から「愛（万有愛護）」の概念が導入されたもの（大本の教義）をベースにして大先生がお話されていると理解して宜しいかと思います。

宗教だからということで毛嫌いさえしなければ、100 年余りの間に確立された、意味がはっきりした言葉（定義が確定している『古事記』の中の言葉）によって合気道の理合や奥義を知ることが出来ると思いますので、『古事記』を神話として見る立場を離れて取り組みましょう。

「合気道を学ぶものは古事記を学びなさい、なぜならば合気道は古事記の（中に述べられている古神道の解釈に従った／古神道の定義による言葉によって説明される）営み（実行）であるのだから」私は、合気道の理合や奥義はシンプルなものだと思いますが、大先生がそれを『古事記』の言葉で幾重にも、また、いろんな側面から説明されていると思っています。

## 序文

### 過去の時代（序文の第一段）

「宇宙のはじめに當つては、すべてのはじめの物がまずできましたが、その氣性（氣象）はまだ十分でございませんでしたので、名まえもなく動きもなく、誰もその形を知るものはございません。それからして天と地とがはじめて別になつて、アメノミナカヌシの神、タカミムスビの神、カムムスビの神（造化三神）が、すべてを作り出す最初の神となり、そこで男女の両性がはつきりして、イザナギの神、イザナミの神が、萬物を生み出す親となりました」

これは、天地開闢（『靈界物語』では天地剖判）のくだりです。

『日本書紀』では、「古（いにしえ）天地（あめつち）未だ剖（わか）れず、陰・陽、分かれざりしときに、渾沌たること鶏の子の如くして、溟滓（ほのか）に牙（きざし）を含めり。其れ清く陽（あきら）かなるは、薄靡（たなび）きて天（あめ）と爲り、重く濁れるは、淹滞（つつ）いて地（つち）と爲るに及びて、精（くわ）しく妙なるが合えるは搏（むら）り易く、重く濁れるが凝（こ）るは竭（か）たまり難し。故（かれ）、天（あめ）先（ま）ず成りて、地（つち）後に定まる。然して後に、神聖（かみ）其の中に生る。故、曰く、開闢の初めに洲壤（くにつつち）浮き漂うこと譬えば遊ぶ魚の水の上に浮べるが猶（ごと）し。時に、天地の中に一つ物生（な）れり。状（かたち）葦牙（あしかび）の如し。便（すなわ）ち神と化爲（な）る。國常立尊（くにのとこたちのみこと）と號（もう）す。【至りて貴きを尊と曰い、それより餘（あまり）を命と曰う。並びに（註 どちらも）美舉等（みこと）と訓（よ）む。下（しも）皆（みな）此（これ）に效（なら）え】 次に國狹槌尊（くにのさづちのみこと）。次に豐斟淳尊（とよくむぬのみこと）。凡（およ）そ三はしらの神。乾道（あめのみち）獨り化（な）す。所以（ゆえ）に此れ純（まじりなき）男（お）と成す（卷第一 第一段 一書第四にやつと古事記と同じ造化三神が「又曰く、高天原（たかあまはら）に生（な）れる神は、名を天御中主尊（あめのみなかつぬしのみこと）と曰う。次に高皇產靈尊（たかみむすひのみこと）。次に神皇產靈尊（かむみむすひのみこと）。皇產靈、此を美武須毗（みむすひ）と云う」と異説として付記されている）」（<http://www004.upp.so-net.ne.jp/dassai1/shoki/frame/01/01/fr.htm>）と書かれている部分です。

これに次の部分を合わせて読むと良いと思います。

### 一、イザナギの命とイザナミの命

天地のはじめ

「昔、この世界の一番始めの時に、天（高天原）で御出現になつた神様は、お名をアメノミナカヌシの神といいました。次の神様はタカミムスビの神、次の神様はカムムスビの神、この御三方は皆お獨（ひとり）で御出現になって、やがて形をお隠しなさいました」

簡単で短い部分ですが、合気道にとっては重要な部分です。

2015年8月19日

### 古事記 現代語譯 古事記 (3)

「合気道とは大自然の絶対愛を基として…皆空の心と体を造り出す精妙なる道である」（『合気神髄』p.53）とおっしゃられている、合気道の基となる「絶対愛」の本源について述べられた部分だからです。

そのことが分かるためには、平田篤胤の時に国学の中に（禁書であった漢訳聖書を入手したことにより）キリスト教の聖書の知識が入って来て、言霊学が聖書の「太初（はじめ）に言（ことば、註 ヘボン訳では「言霊」）あり、言は神と偕（とも）にあり。言は神なりき。この言は太初に神とともに在（あ）り、萬（よろず）の物（もの）これに由（よ）りて成（な）り、成りたる物に一（ひとつ）つとして之（これ）によらで成りたるはなし」（ヨハネ伝 1 章 1-3 節）から、言霊によって天地（万物）が造られたという考えに基づいていることを知っておくと良いでしょう。

言霊 75 声説は、中村孝道から高弟の望月幸智を通して、幸智の孫の大石凝真素美（明治 6 年（1873）までは望月大輔という名）に伝えられました。

中村孝道は、『言霊或問（ことだまわくもん）』で言霊について説明し、ス声を中心とした 75 声の 1 音 1 音に霊が宿っているとしています。そして、その声が組み合わされて万物の名となると言っています。

「又問、其言霊といへるものはいかなるものぞ。答て曰、是人の声の霊なり。夫（それ）人は七十五声出て、其声毎に義理備る。其義を号（なづけ）て言霊といふ。かく一声毎に霊有（ある）をもて、是を二声三声或は四声五声と組つらぬる時は、千万の名となり詞となりて、世の物事いひ尽さずといふ事なく、又さとし尽さずといふ事なし」（『言霊或問』）

大石凝真素美は、ス声（素の氣）が初発（はじめ）から存在していたものであり、それが澄みきり広がりきって形をなして行くと述べています。

「夫れ此の世の極元（こもと、大先生のいうポチのこと）を ス（素という偏〈へん〉に氣という 旁〈つくり〉の合成漢字を当てている）といふ物が極乎恒々（すみきり）至大浩々而（ひろぎきりて）、自然（をのづ）と十八稜團（とをまりやかどつぶ、大石凝真素美著『眞訓古事記』では「こんぺいとう」と読む）の形を備（そなへ）をり。湛々（ただよひて）玄々（ふかまり）黙々（ありつつ）、恒々（つららぎ）たりつ。其（その）スと云ふ質（もの）を蒸氣（ゆげ）よりも煙よりも香（きり）よりも猶々（なほ）微細（こまか）なる神霊元子（こえのこ、声の子、言霊）が至大浩々（ひろぎきり）の域（ところ）にカミ充實（つまり）に實相（つまり）きりて、幾々（ゐくゐく）却大約（おほつな）の昔より生き通しに生き居（お）る者也ける」（『大日本言霊』）

また、この「スという物（ス声）」が凝結して天之御中主の神となったと説明しています。

「抑（そもそも）此世の大元素は 其（その）至始元の時に●（丸にポチの表象は水茎文字の「す」）と謂ふ物あり。神々 霊々 浩々 湛々として 至大 至誠矣（なり）。極乎として純なる物矣。然り而して 其中心（ただなか）が定まりて 動かざる也。其中心の動かざる所に靈氣が凝結して地球と成りたり。其

名（な）を天之御中主（あめのみなかぬし）の神と謂ふ矣。故（か）れ天之御中主の神は 此地球を以て神體（からたま）とし 至大天球を以て 神靈魂（みたま）とし玉ふ矣。

○ 然り而して 中心なる地球より 右に螺旋して 天底に昇騰する 氣機あり。其名を高皇産靈の神と謂ふ矣。亦天底より 左に螺旋して 地球に降り着（つ）く氣機あり。其名を神産靈の神と謂ふ矣。然り而して経緯 輪廓 條理 脉絡 明細に組織し、極然として彌縫（弥縫、びほう） 紋理する矣」（『弥勒出現成就経』）

この言霊学は大石凝真素美から出口王仁三郎聖師に伝えられますが、王仁三郎聖師は、一時、キリスト教に傾倒したこともあってか、はたまた万教同根の考えからか、キリスト教の教義・概念を多く取り込みました。それでス声を「主（ス）の神」とも呼ぶようになります。

キリスト教では、キリシタンの時代に「デウス (Deus)」を「天主」と言っていました。現在も神様 (Lord) を「主」と呼んでいます。ここから「主の神」が導き出されたようです。大本教や大本教に連なる多くの神道系宗派では「主の神」を「スの神」と呼んでいます。「ス」は最初に発生した言霊ですが、「いろは歌」の最後の「す」でもあり、「我（われ、主なる全能の神）はアルパ（最初）なり、オメガ（最後）なり」（ヨハネの黙示録 1 章 8 節）とも合致すると考えられて「主（ス）の神」となっているようです。

道歌に「◎（ス）の御親 七十五（ななそいつつ）を生み出して 合気の道を教えたまえり」（『合気神髓』 p.45）とある「スの御親」が、その「主（ス）の神」のことです。合気の道は大自然の絶対愛（万有愛護の大精神）を基とした道であるということを示す道歌だと思います。

なお、『合気神髓』には「日の御親」と載っていますが、「◎の御親」の誤りなので訂正して示しました。また、「御親」は『霊界物語』では「御祖（みおや）」と書かれています。最初の神という意味が込められているからです。

古事記の序文は、聖書の「元始（はじめ）に神（かみ）天地（てんち）を創造（つくり）たまへり。地（ち）は定形（かたち）なく曠空（むなし）くして黑暗（やみ）淵（わだ）の面（おもて）にあり 神の靈（れい）水（みず）の面を覆（おほい）たりき （初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた）」（創世記 1 章 1-2 節）とよく似た部分だと思います。

国学で古事記を解釈する時、聖書のこの部分も影響を与えたのではないかと思います。聖書の「天地創造」と古事記の「天地開闢（かいびやく）」や霊界物語の「天地剖判（ぼうはん）」との違いは、永遠に存在している神が天地（宇宙）を創造されたか、混沌とした中で最初の神が現れて天地に分かれたかということですが、あまり些細なことに拘らないで下さい。

出口王仁三郎聖師の「主（ス）の神」は天地創造の神と認識され、至仁、至愛を備えられた御方とされています。

「さは然（さ）りながら天地（あめつち）を 造り玉ひし主（す）の神は 至仁（しじん）至愛（しあい）に坐（ま）しませば」（霊界物語 20-99-2）

厳密に考えすぎなければ、「主の神」という呼び名はキリスト教・ユダヤ教の「主（Lord・ヤハウェ）」やイスラム教の「創造主（アッラー）」の呼び名と考えることが出来ると思います。そう考えると、合気道が世界的な広がりを見せる今日、抵抗なく神道を信じていない国の人々にも理解されるのではないかと思います。

言霊のス声が宗教的には主（ス）の神であって、万有愛護の存在であると理解して読み進めると、大先

生の話の奥深いと言われるところが分かってくると思います。

2015年9月15日

#### 古事記 現代語訳 古事記(4)

古事記の序文に相当する部分は、道文に「一霊四魂三元八力の大元霊が一つなる大神の御姿である。大神は一つであり、宇宙に満ちみちて生ける無限大の弥栄の姿である。すなわち天なく地なく宇宙もなく大虚空宇宙である。その大虚空に、ある時ポチ（ㄋ）一つ忽然として現わる。このポチこそ宇宙万有の根源なのである。そこで始め湯気、煙、霧よりも微細なる神明の気を放射して円形の圏を描き、ポチを包みて、始めて「ス」の言霊が生まれた。これが宇宙の最初、霊界の初めであります。そこで宇内（宇宙）は、自然と呼吸を始めた。神典には、数百億万年の昔とあります。そして常在（すみきり）、すみきらいつつ即ち一杯に呼吸しつつ生長してゆく、ゆくにしたがって声がでたのである。言霊が始まったのである。キリストが『太初（はじめ）に言葉あり』といったその言葉がそれで、その言霊がスであります、これが言霊の始まりである。このス声は、西洋にはこれに当てる字はなく、日本のみにある声である。これが生長してス、ス、ス、ス、即ち上下左右のス声（+）となり、丸く円形に大きく結ばれていって（⊕丸に十字の形）呼吸をはじめるのである。ス声が生長して、スーッとウ声に変わってウ声が生まれる。絶え間ないスの働きによってウの言霊が生じるのである。ウは靈魂のもと物質のもとであります。言霊が二つにわかれて働きかける。御霊は両方をそなえている。一つは上に巡って（ウァと）ア声生まれ、下に大地に降って（ウォと）オの言霊が生まれるのである。上にア下にオ声と対照で気を結び、そこに引力が発生するのである」（『合気神髄』pp.110-111、『合気道新聞』第158号、2012年4月4日の「真の合気の道(2)」掲載）と詳しく述べられています。

大先生の説明は、次に示す霊界物語 73-1-1 「天祥地瑞子 天之峯火夫の神」から取られています（ルビ付きの霊界物語は <http://reikaimonogatari.net/>参照）。

「天もなく地もなく宇宙もなく、大虚空中に一点の、（ホチ）忽然と顕れ給ふ。この、たるや、すみきり澄みきらひつつ、次第々々に拡大して、一種の円形をなし、円形よりは湯気よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の気放射して、円形の圏を描き、を包み、初めて●（ス）の言霊生れ出でたり。この●の言霊こそ宇宙万有の大根元にして、主の大神の根元太極元となり、皇神国の大本となり給ふ。我日の本はこの●の凝結したる万古不易に伝はりし神霊の妙機として、言霊の助くる国、言霊の天照る国、言霊の生くる国、言霊の幸はふ国と称するも、この●の言霊に基くものと知るべし。キリストの聖書にヨハネ伝なるものあり。ヨとはあらゆる宇宙の大千世界の意なり、ハは無限に発達開展、拡張の意なり、ネは声音の意にして宇宙大根本の意なり。ヨハネ伝首章（第一章）に曰く、『太初（はじめ）に道（ことば、註 ギリシア語のロゴス）あり、道は神と偕（とも）にあり、道は即ち神なり。この道は太初に神と偕に在き。万物これに由（より）て造らる、造られたる者に一としてこれに由らで造られしは無（なし）』（註 聖書の明治元訳の引用）と明示しあるも、宇宙の大根元を創造したる主（ス）の神の神徳を称へたる言葉なり。清朗無比にして、澄切り澄きらひスースースースーと四方八方に限りなく、極みなく伸び拡がり膨れ上り、遂に●は極度に達してウの言霊を発生せり。ウは万有の体を生み出す根元にして、ウの活動極まりてまた上へ上へと昇りアの言霊を生めり。またウは降つては遂にオの言霊を生む。●の活動を称して主の大神と称し、また天之峯火夫（あまのみねひを）の神、またの御名を大国常立神言（おほくにとこたちのみこと）と奉称す。大虚空中に、葦芽（あしがひ、註 葦の芽）の如く一点の、発生し、次第々々に膨れ上り、鳴り鳴りて遂に神明の形を現じたまふ。●神の神霊は●の活動力によりて、上下左右に拡がり、●極まりてウの活用を現じたり。ウの活用より生れませる神名（しんめい）を宇迦須美（うがすみ）の神と言ふ、宇迦須美は上にのぼり下に下り、神霊の活用を両分して物質の大元

素を発生し給ひ、上にのぼりては靈魂の完成に資し給ふ。今日の天地の発生したるも、宇迦須美の神の功なり。ウーウーウーと鳴り鳴りて鳴極まる処に神靈の元子生れ物質の原質生まる。故に天之峯火夫の神と宇迦須美の神の妙の動きによりて、天津日鉾の神大虚空中に出現し給ひ、言靈の原動力となり七十五声の神を生ませ給ひ、至大天球を創造し給ひたるこそ、実に畏き極みなりし」

更に遡れば、前述の大石凝真素美著『大日本言靈』（大石凝翁全集、4 「大日本言靈」）や次の同著『眞訓古事記』などに辿り着きます。大先生の言葉の「神典」はこれらの書を指しています。

「抑々（そもそも）此世が未だ開闢せざりし極元の時には唯スといふ物が、至大浩々（ひろぎひろぎて）神々露々（ぬき）烈々恒々湛々（ぬき）として、十八稜團（こんぺいとう、**註** 正方形6個と正三角形8個でできる立方八面体）の象（かたち）を造りて、ス…ス…ス…ス…ス…ス…と呼吸（いき）をして億々恒々極乎として居たる者也。是を一言にスといふ也。故に現在のスも億萬劫々々年度の昔の人のス聲同一事成る。故に今スという聲を説く時は其の一切が明に爰（あらは）れ生れ出る也。言靈の巻を見れば明也。

其スの性質は蒸氣よりも煙よりも香よりも猶微細なるスといふ物也。此のスが人の一呼吸の間に、三百七十五息（ぬき）をしつゝ、浩々恒々（ひろぎひろぎ）てある故に、敢へて死ぬる暇がない（**註** 生き通しに生き居る者也ける）。故に億兆萬々劫々幾々劫大約（おほつな）の昔より極乎として居る時に、至大浩々湛々の域に機が起り、十八稜團の瘤の麓の所に對照力が起る。此の對照力が幾々億萬劫々劫数の限り起り、全く張り詰めて球の形を顯はす。是を至大天球（たかまがはら）といふ也。此の天球の中心部に、即ち上下左右縦横無盡に起る對照力の中心點に大氣が結晶して地球と成りし也。此地球は至大天球の中心部に成り定まり玉ひし故に天之御中主神と名のり玉ふなり。故に天之御中主神は此の地球を以て御神體と定め玉ひ、此の至大天球を造營しつゝ、ひたし居り玉ふ氣形透明體なるスを以て、大御心とし玉ふ也」

ちなみに、ス声が拡がるこの部分は宇宙のビッグバンと捉えられますが、ビッグバン宇宙論が提唱されたのは1927年で、『大日本言靈』が大石凝翁全集で出版されたのが大正13年（1924）ですから、西洋科学（ビッグバン宇宙論）の影響は受けていないようです。

また、万葉集の言靈を詠んだ歌から、古くから言靈の力が認識されていたようですが、これは仏教の真言（マントラ）やキリスト教の聖書の言葉「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった」（創世記1章3節）からも分かるように日本に限ったことではないというのが定説のようです。

大先生の場合、幼少の頃、真言密教に関心を抱かれたとのことですので、真言の延長で言靈を抵抗なく受け入れることが出来たのではないかと思います。

2015年9月30日

## 古事記 現代語譯 古事記(5)

大先生の言葉は、『靈界物語』や『眞訓古事記』に記されている至大天球（たかあまはら、宇宙）の創造の範囲を超えて、更に次のように続きます。

「高天原（たかあまはら）というのは、宇宙の姿である。宇内の生きた経綸の姿、神つまります経綸の姿なのである。一家族も一個人もそれぞれ高天原であり、そして呼吸して生々と生きているのである。高天原とは一口でいえば、全く至大天球成就すということになる。これ造化開闢（かいびやく）の極元なり。高天原の意をより理解して、神の身分分業をなしてゆくところに合氣道が出来るのである。

宇宙の氣、於能碁呂（おのころ）島の氣、森羅万象の氣、全ての靈素の道をつづめて、そして呼吸を合わせて、その線を法則のようにして、万有の天の使命を果たさせるのである。そしてその道それぞれに

ついて行うところの大道を合気道という。合気道とは、いいかえれば、万有万神の条理を明示するところの神示であらねばならないのである。過去－現在－未来は宇宙生命の変化の道筋で、全て自己の体内にある。これらをすみ清めつつ顕幽神三界と和合して守り、行っていくものが合気道であります。

宇内の活動の根元として七十五声がある。その一つ一つには三つの規則がある。生産霊（イクムスビ、△）足産霊（タルムスビ、○）玉留産霊（タマツメムスビ、□）である。

八力（動静、解凝、引弛、分合。対照力）がアオウエイ（天地結水火）の姿であり、国祖国之常立神（くにのとこたちのかみ、女神、地）の御心のあらわれである。豊雲野大神（とよくもののおおかみ、男神、天）との交流により伊豆能売（いずのめ、註 五つは誤り）の神の働きが現れるのである。かくて八大引力が対照交流し動くとき軽く澄めるものは天に昇り、濁（にご）れるもの汚（よご）れるものは下へ地へと降った。天と地が交流するたびに、物化して下降、交流しては下降し、だんだん大地化してきた。これが玉留産霊（タマツメムスビ）の大神の神技である。生産霊、足産霊、玉留産霊の三元がととのうと、宇宙全体の姿が出来上がるのである。

合気とは、言霊の妙用であります。言霊の妙用は一霊四魂三元八力の分霊分身である」（『合気神髄』pp.111-113、『合気道新聞』第158号）

「生産霊（△）、足産霊（○）、玉留産霊（□）の三元が整うと、宇宙全体の姿が出来上がるのである」聖書のヨハネ伝1章に「万物（よろずのもの）これに由（より）て造らる、造られたる者に一としてこれに由らで造られしは無（なし）」とありましたが、△○□の三元が整い、やっと宇宙全体の姿（宇宙を構成する基本的形象、万物）が出来上がったというのが、大先生が付け加えられている部分です。

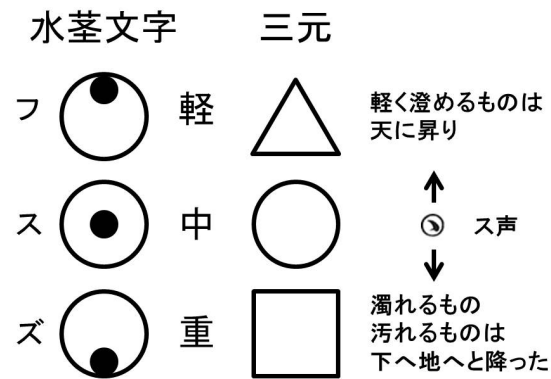
「宇内の活動の根元として七十五声がある。その一つ一つには三つの規則がある」

七十五声に三つの規則があるということは、「真素美（ますみ）の鏡」にアオウエイの言霊がそれぞれ「軽、中、重」の三段に分れるという規則があることを指して言われています（<http://terakoyajuku.jp/s10/018.html>、<http://www.walaku.com/bbs144.htm> 参照）。水茎文字で表わすと、例えば、スは丸（○）の中心に点（・）がありますが、軽のフは点が丸の上部にあり、重のズは丸の下部にあります。

そして、これを△○□に適用すると「天の△が軽、○が中、地の□が重」で、産霊（むすび）の三神を当てると「△が生産霊、○が足産霊、□が玉留産霊」であるということだと思います。大先生は、三角が天（及び火）、四角が地を表わすと言われています（『武産合気』p.37 参照）。

「かくて八大引力が対照交流し動くとき軽く澄めるものは天に昇り、濁れるもの汚れるものは下へ地へと降った」

次の図を見ればこの部分の理解が進むと思います。



「(武産の) 合気とは、(ス声とス→ウ→ア (天)・オ (地) と分れ、交流する) 言霊の妙用であります。言霊の妙用は (天の数歌に示された) 一霊四魂三元八力の分霊分身 (としての働き) であります」大先生は、△○□を「モチロ」と読ませています。モチロは「ヒフミ祝詞」の「も (百) ち (千) ろ (万)」で、「天の数歌」では「もも (百) ち (千) よろず (万)」です。△○□全体でモチロです。

「天の数歌 (あめのかずうた)」の「一二三四五六七八九十百千万」は「ひと、ふた、み、よ、いつ、むゆ、なな、や、ここの、たり、もも、ち、よろず」と唱え、次のように天地剖判の様子を表わしています (『大地の母』10 巻 7 章天地剖判、<http://shoutakaamahara.blog.fc2.com/blog-entry-23.html>)。

- ・ひと (霊交)：一霊四魂／大宇宙の根源に独一真神 (天之御中主神、ス神) がましまし、一霊のもとに四魂 (奇魂、荒魂、和魂、幸魂) を統べておられる。
- ・ふた (活力)：真神の営みである陰陽 (高御産巢日神・神産巢日神) 二元の組みあわせによって「八力」が生ずる。
- ・み (体)：八力の複雑微妙な結合により、剛・柔・流の「三元」が生ずる。
- ・よ (世)：泥海のような世界ができる。
- ・いつ (出)：日月星辰 (じつげつせいしん) や大地が誕生する。
- ・むゆ (燃)：草木をはじめ、諸生物が萌えいでる。
- ・なな (地成)：人類が生れ、地上の世界が成就する。
- ・や (弥)：その世界がますます発展する。
- ・ここの (凝)：充実安定を表わす。
- ・たり (足)：完成の域に達する。
- ・もも (諸)：さらにもろもろのモノが生ずる。
- ・ち (血)：大造化の血が宇宙をくまなく巡り、生命力が満ちる。
- ・よろず (夜出)：生成発展の光明世界が永遠に開けていく。

「之を大括して略解すれば、霊力体 (れいりょくたい) によって世が発生し、水火 (すいか) の呼吸 (いき) 燃え上り、初めて地成り、弥々 (いよいよ) 益々 (ますます) 水火の気凝り固りて完全無欠の宇宙天界は完成され」(霊界物語 73-1-10) が一 (ひと) から十 (たり) までで、「△○□の三元が整い、宇宙全体の姿が出来上がる」が百千万 (もも・ち・よろず) です。

△○□が「三角に入身して (構えて)、丸く捌いて、四角におさめる」という体の動きを表わすということは広く理解されていると思いますが、その意味で「初めは物の霊 (体、魄)、物の霊というのは、モチロ (△○□)。モチロの気の熱せるは合気」(『合気神髄』p.89、合気道新聞 第 96 号、句読点を訂正、p.52 △○□の気の熟したるを合気) と大先生は説明されています。

「モチロの気の熱せる（＝合気）」「△○□の気の熟したる（＝合気）」は次の道文で示される「△○□」が一体化して…、それが気の流れとともにスミキル（＝合気道）」という状態を指しています。

「△○□が一体化して （△○□が重なった形象）となり、それが気の流れとともに円転してスミキルのが合気道じゃ」（平成 11 年刊『植芝盛平伝』 pp.266-267）

△○□が一体化したものは、「これ、魂のモチロの中心であります」（『合気神髄』 p.69）の「魂のモチロ」だと思います。

さて、それが日頃の稽古の中の何を指しているか、八千代合気会の会員には夜に昼に頭の片隅に置いて考えて頂きたいと思います。何だろう、もっと知りたいなと考えていると、ある時、ピンと来るものを感じるに違いありません。

2015 年 10 月 15 日

### 古事記 現代語訳 古事記 (6)

△○□には、もう一つの意味が込められています。

それは△○□で「アイキ」と読むことですが、八千代合気会の皆さんは「モチロ」と読むのよりももっと良くご存じのことかと思います。どうしてそう読むのかということは『合気道の王座』（1960 年 NTV 制作の映画）の中に大先生が座学で教えられている場面が映されていて、そこから分かります。

次の写真がその座学の資料です。



映画では、この図は模造紙に書かれていますが、昭和 43 年(1968)6 月 16 日の武産合気教室で大先生が合気道の教学を講義された折には半紙のようなものに書かれているものを示されていたように記憶しています（確か合気道新聞でその時の写真を見たという記憶に基づいていますが、定かではありません）。したがって、合気道の教学の核心部分になるものと受け取って良いでしょう。

この資料には、一霊四魂三元八力の右に△○□（三元の図）、その右に「水火の結び」の図が描かれています。一霊四魂三元八力の働きにより宇宙全体の姿（△○□）が整い、アイキ（合気）が生まれた、ということになると思いますが、この映画では「天の呼吸と地の呼吸を人は受けて」という説明がなされていることが分かります。この水火の図の丸は「水」で出る息、四角は「火」で入る息を表わすものです。出典を辿れば山口志道の『水穂伝（みずほのつたえ）』に行き当たり、そこに「出息は水なり○（まる）なり 引息は火なり□（かく）なり」と書かれていることが分かります。



山口志道によると、水火と書いて「イキ」と読むので、水火の図の横にフリガナが振られています（水＝イ、火＝キ）。一番上の丸と四角が重なった水火の結びの図は、合気道では天の呼吸と地の呼吸が合したものの、即ち武産合気を表わしています。

「それで天の呼吸、地の呼吸を腹中に胎蔵する。自分で八大力の引力の修行をして、陰陽を適度に現し、魂の霊れぶりによって錬磨し、この世を浄めるのです。吐く息は  である。引く息は  である。腹中に  を収め、自己の呼吸によって  を  の上に収めるのです」（『武産合気』 p.134）

この丸と四角が重なった水火の結びの図は、水火（イキ）を「氣」とも読ませているので、大先生は、三元の図の△を天の氣と説明されて対比されていると思いますが、三元の図の△は「天・火」を表わし、アイウエオ（天火結水地）でアが天なので、△をアと読みます。

「合気道はまたアオウエイの五つの声の働きでもあります。これは水火（すいか）のむすびの二元に密接な関係があるのであります。神道でいう高御産巢日（たかみむすび）、神産巢日（かみむすび）の二神であります。この二つの流れ（螺旋のめぐり）の御振舞によって世界が出来るのであります」（『武産合気』 p.34）

「（大宇宙の）ご全徳を一つの剣にても天地の呼吸に同化する。即ち人として務めをするにも、息を出す折には丸く息を吐き、引く折には四角になる。そして宇宙の妙精を身中に丸く巡らし六根を浄め働かすのです。丸く吐くことは丁度水の形をし、四角は火の形を示すのであります。丸は天の呼吸を示し、四角は地の呼吸を示すのである。つまり天の氣（三元の△、天＝ア）によって天の呼吸（○、水＝イ、日月の運行）と地の呼吸（□、火＝キ、潮の満干）を合わせて技を生み出す（註 アイキ、即ち武産合気となる）」（『武産合気』 p.45）

如何でしょうか？ 「△＝ア、○＝イ、□＝キ」に込められた意味がはっきりとして来たでしょうか。私の説明が牽強附会（けんきょうふかい）でなく、大先生の教えの奥深いものを解きほぐすものになっていれば良いのですが・・・。

この部分は、次の道文と関連があります。単にアイキという言葉が出来上がったということではなく、武産合気、摩擦（連行）作用、呼吸力（水火、即ちイキの力。金剛力）という大先生が開かれた合気道の根本理念、理法、技法が出て来たという核心部分です。

「天の運化により修行する方法が即ち私の合気道であります。この一元より出てくる宇宙の営みのみ姿、水火のむすびつまり天の呼吸と地の呼吸とを合し、一つの息として産み出してゆくのを武産合気というのであります。・・・水精火台の生じる摩擦作用の模様と全く同一形式なのであります。・・・火と水の交流・・・天地の呼吸（註 日月の運行により潮の満干が起ることを指す。合気道の摩擦連行作用）である」（『武産合気』 pp.43-44）

「天ノ浮橋とは火と水の交流である」（『武産合気』 p.134）

「呼吸の凝結が、心身に漲（みなぎ）ると、己れが意識的にせずとも、自然に呼吸が宇宙に同化し、丸く宇宙に拡がっていくのが感じられる。その次には一度拡がった呼吸が、再び自己に集まってくるのを感じる。このような呼吸ができるようになると、精神の实在が己れの周囲に集結して、列座するように覚える。これすなわち、合気妙応の初歩の導きである。合気を無意識に導き出すには、この妙用が必要である。こうして合気妙用の導きに達すると、御造化の御徳を得、呼吸が右に螺旋して舞い昇り、左に螺旋して舞い降り、水火の結びを生ずる、摩擦連行作用を生ずる。水火の結びは、宇宙万有一切の様相根元をなすものであって、無量無辺である。この摩擦連行作用を生じさすことができこそ、合気の真髓を把握（はあく）することができるのである。」（『合気神髓』 p.87）

「一挙一動ことごとく水火の仕組みである。いまや全大宇宙は水火の凝結せるものである。みな水火の動きで生々化々大金剛力をいただいて水火の仕組みになっている。水火結んで息（いき）陰陽に結ぶ。みな生成化育の道である。稽古は中心に立つ空気を媒介として己れの魂より結んで稽古をする。いまや天運循環している。稽古は水火の仕組みを練る、習うている。伊邪那岐（いざなぎ）、伊邪那美（いざなみ）二柱の神つまり天の道を行なう。統一が一番大切である。これは梅の花。これを十分に研究しなければならない。吐く息はエイと、円」（『合気神髓』 p.141）

「合気はまず十字に結んで天底（てんてい）から地底（ちてい）息（いき）陰陽水火の結びで、己れの息を合わせて結んで、魄と魂の岩戸開きをしなければならない。魄は物の霊を魄という、宇宙組織のタマのひびきが魂である。宇宙を動かす力を持っていなければいけない。天の運化が、すべての組織を浮きあがらせ、魄と魂の二つの岩戸開きをする。これをしなくてはいけない。そうでなかったら本当の人にはなれない。それには心の洗濯が大切である」（『合気神髓』 p.88）

「また、地球修理固成は気の仕組みである。息（いき）陰陽水火の結びである。そして御名は伊邪那岐（いざなぎ）、伊邪那美（いざなみ）の大神と顕現されて、その実行に移したのが合気、どんなことでも出来るようになってくる。高御産巢日（たかみむすび）の神、神産巢日（かみむすび）の神、心は丸く体三面に進んでいかなければならない」（『合気神髓』 p.89）

大先生が、稽古の前、礼拝する時、いつも「ひと、ふた、み、よ、いつ、むゆ、なな、や、ここの、たり、もも、ち、よろず」と唱えられた、と伝えられています。

この時の大先生のお気持ちを推し量るには、次の道歌を詠めば良いかと思います。

「スの御親 七十五（ななそいつつ）を生み出して 森羅万象（よろずのもの）を造りたまう」（『合気神髓』 p.27）

「◎（ス）の御親七十五を生み出して 合気の道を教えたまえり」（『合気神髓』 p.45）

「大御神七十五声（しちじゅうごせい）を生みなして 世の経綸をさづけ給へり」

「緒結びの七十五（ななそいつ）つの御姿は 合気となりて世をば清めつ」（『合気神髓』 p.194）

大先生による古事記のこの部分に関連する説明は、大本の教え（宗教の教え）に付加する部分が大で、合気道にとっての重要な部分（教学）です。それで、大先生は宗教の教えと合気道（武産合気）とを対比して次のようにおっしゃられているのではないのでしょうか。

「私の武産の合気は、宗教から出て来たのかということそうではない。（宇宙の真理に基づいた）真の武産から宗教を照らすのです。未完の宗教を完成へと導く案内であります」（『武産合気』 p.192）

2015 年 12 月 28 日

### 古事記 現代語譯 古事記（7）

武田祐吉が、「昔、この世界の一番始めの時に、天で御出現になった神様は、お名をアメノミナカヌシの神といいました。次の神様はタカミムスビの神、次の神様はカムムスビの神、この御三方は皆お獨（ひとり）で御出現になって、やがて形をお隠しなさいました」と書いている部分は、本居宣長の古事記傳「天地（あめつち）の初發（はじめ）の時 高天原（たかまのはら）に成りませる神のみ名は天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）（訓高下天云阿麻効下此。「高の下の天は阿麻くあま」と読む、以下同じ）という意） 次に高御産巢日神（たかみむすびのかみ） 次に神産巢日神（かみむすびのかみ） 此の三柱（みはしら）の神は みな獨神（ひとりがみ）成りまして み身を隠したまひき」の現代語訳です。

古事記の「高天原」を、武田祐吉は「天」と訳しています。一般的にはその理解で宜しいかと思いますが、大先生は「宇宙の姿、全大宇宙」を意味していると捉えられ、その宇宙と一体となることを説かれています。関連する道文を挙げてみましょう。

「高天原（たかあまはら）というのは、宇宙の姿である。宇内の生きた経綸の姿、神（かん）つまります経綸の姿なのである」（『合気神髓』 p.111、『武産合気』 p.87）

「高天原ということは、全大宇宙であるが、ことごとく魂のふりかえによって、地上は立派な営みの斎場（さいじょう。神道で祭祀を行う清浄な場所、いつきのにわ）にならなければならぬ」（『武産合気』 p.59、p.77 も同）

「天をさがしても地をさがしてもタカアマハラはどこにもありません。ではどこにあるのか。大宇宙がタカアマハラであります」（『武産合気』 p.72）

「生き通しの生命を腹中に胎蔵し（過、現、未の全部を引きしめて）、宇宙も悉く腹中に胎蔵して、自分が宇宙となるのであります。自分が宇宙と一体となるのであります。それはとりもなおさず高天原と一体です」（『武産合気』 p.70）

宇宙と一体（神人合一）なので高天原は自分自身にもなります。

「タカアマハラはまた自己であり、（補足 彼我の対立なく）みな共に手を取合って」（『武産合気』 p.98）

古事記の「高天原」を、大先生は「タカアマハラ」と読まれています。合気神社の例大祭であげる天津祝詞（あまつのりと）も「タカアマハラ」ですが、神社本庁の祝詞では「タカマノハラ」と唱えられているので、「訓高下天云阿麻効下此」と書かれていても本居宣長は当時の祝詞そのままに読みを付けたのではないのでしょうか。

「全大宇宙を高天原と称す。…この義（こころ）を声にあらわし、タとは対照力（たいしょうりょく）、カは掛け貫く力（p.120 内部の光が輝いて来る）、アとは神霊顕彰（けんしょう、彰らかに顕る）、宇宙全く張りつむるなり。マとは全く張りつめて、玉となることをいう。またこの極微点の連珠糸（さぬき）となす。神霊元子が活気臨々（かっさりりん）として活動している義（こころ。気は誤り）を称して、一言にハという。これは活気臨々、至大熙々（きき）というなり。またその造化の機が運行循環している義（気は誤りか。こころ）を称して、ラという。即ち循環運動のことである。 タ（対照力） カ（掛け貫く力） ア（神霊顕彰、而して宇宙為る） マ（全く張りつめたる玉） ハ（神靈活気臨々、至大熙々） ラ（循環運行） かくして至大天球成就畢（おわ）るというなり」（『武産合氣』 pp.92-94）

「つまりタカアマハラは造化器官で、すべてのものを生み出す家なのです」（『武産合氣』 p.120）

霊界物語でも主に「タカアマハラ」と読んでいますが、言霊で「タカマガハラ」と解いているのもあります。これらが先生の言霊解の基礎となっています。

「ここに宇迦須美（うがすみ）の神（ウの言霊）は●（ス）の神の神言（みこと）もちて、大虚空中に活動し給ひ、遂にオの言霊を神格化して大津（おおつ）瑞穂の神を生み給ひ、高く昇りて（補足 アの言霊を神格化して）天津（あまつ）瑞穂の神を生ませ給ひぬ。大津瑞穂の神は、天津瑞穂の神に御逢ひてタの言霊、高鉾（たかほこ）の神、カの言霊、神鉾（かむほこ）の神を生ませ給ひぬ。高鉾の神は太虚中に活動を始め給ひ、東に西に南に北に、乾坤（けんこん）巽艮（そんごん）上下の区別なくターターター、タラリタラリ、トータラリ、タラリヤリリ、トータラリとかけ廻り、神鉾の神は、比古神（ひこがみ）とともにカーカーカーカーと言霊の光かがやき給ひ、茲（ここ）にいよいよタカの言霊の活動始まり、高鉾の神は左旋運動を開始し、神鉾の神は右旋運動を開始して円満清朗なる宇宙を構造し給へり。茲において両神の活動は無限大の円形を造り給へり。この円形（註 まる）の活動をマの言霊と言ふ、天津真言（まこと）の大根元はこのマの言霊より始まりぬ。高鉾の神（タ）、神鉾の神（カ）、宇宙に現れ給ひし形（註 神霊顕彰。ア）をタカアと言ひ、円満に宇宙を形成し給ひし活動をマと言ひ、このタカアマの言霊、際限なく虚空に拡がりて果てなし、この言霊をハと言ひ速言男（はやことのを）の神と言ふ。両神は速言男の神に言依（ことよ）さし給ひて、大宇宙完成の神業を命じ給ふ。速言男の神は右に左に廻り廻り鳴り鳴りて螺線形をなし、ラの言霊を生み給ふ。この状態を称してタカアマハラと言ふなり。高天原の六言霊（ろくげんれい）の活動によりて無限絶対の大宇宙は形成され、億兆無数の小宇宙は次で形成さるるに至れり。清軽なるもの、霊子の根元をなし、重濁なるものは物質の根元をなし、茲にいよいよ天地の基礎はなるに至れり」（『霊界物語』 73-1-2）

「復（ま）たこの至大天球を全く張り詰めたる億兆劫々数の限りの対照力（たたのちから）は、皆悉く両々相對照してその中間（なかご）を極微点（こごこ）の連珠糸（さぬき）にてかけ貫き保ち居るなり。この義（こころ）を声に顕はして「対照（タ）」「掛貫力（カ）」「全く張り詰め玉と成る（マ）」といふなり。故（か）れこの至大天球は極微点の連珠糸なる神霊分子を充実して以て機関とし、活機臨々乎（かっさりりんこ）として生きて居る也。この義を称して一言に「神靈活機臨々（ガ）」と言ふ也。復たその膨脹焉（ぼうちやうえん）として至大熙々（しだいきき）たる真相を一言に「至大熙々（ハ）」と言ふ也。復たその造化の機が運行循環しつつ居る義を称して一言に「循環運行（ラ）」と言ふ也。故にこのタカマガハラと言ふ六言の神霊機を明（あきらか）に説き明かす時は、天地開闢の秩序を親しく目撃したる如く聞く者の心中確乎として愉快に感得するに至るべし」（『霊界物語』 75-0-2）

比較してみると、『霊界物語』 75-0-2 の言霊解にないアの言霊について大先生が「神霊顕彰、而して宇宙為る」（『武産合氣』 p.120）、「神霊顕彰 宇宙全くはりつめる」（『武産合氣』 p.93、p.120）という解

を与えていることが分かります。これは『靈界物語』10-2-27の「アの言霊は天（あめ）也、海（あま）也、自然也、○（わ）也、七十五声の総名（そうみょう）也、無にして有也、空中の水霊（参照 水穂伝）也。これを以て考ふれば、吾（あ）とは宇宙万有一切の代名詞である」と同 71-2-8の「これ即ち言霊学上（げんれいがくじょう）アの言霊活用だ。アは天（てん）なり父なり、大宇宙なり、大権威なり」から来ていると思われます。

アの言霊だけでも「天也、海也」「吾（われ。補足 アとも読める）とは宇宙万有一切の代名詞」ですから、古事記の「高天原」は合気道においては天だけでなく海（や地）、及び自己をも含んだ「大宇宙」という概念に繋がります。

タカアマハラを総括すると大宇宙という造化器官で、それに含まれる小宇宙である自己（という造化器官）と一体となり、その造化の機（エネルギー）が螺旋運動（円転）しながら運化する、宇内の生きた経綸の姿ということになり、それが神人合一した武産合気の働きになります。

これを稽古の中で生かすためには、大先生の言葉そのままに信じて、イメージを持つことだと思います。科学的には、量子力学で自然界に存在するものはすべて波動性を持つということで、その目で見ると皆同じで、一体のものです。そう理解すると相手も含めた空間に存在するものすべてが愛おしくなって来ることでしょう。その自然界（無限大の宇宙）の中心は自分の腹中にあると思うと対立心が消え、自ずと結べると思います。

また、時間的にも、神道の「生き通し」や「中今」、仏教の「今を生きる」という精神で、そのイメージを抱くことだと思います。科学的には、目で見て認識している今は神経伝達に要した時間だけ過去の世界なので、これは自分にとっても相手にとっても同じと理解して、勝速日（戸を開けるとサッと光が入って来る速さ）で、何か感じてから動くのではなく、何か感じた時には動き始めている位の感覚を持って稽古をすると良いのではないのでしょうか。ビッグバンの最初の時に存在した素粒子が原子や元素、分子、そして物質に姿を変えて、今もそのまま宇宙空間に存在していると考えたと、誰であろうと何事であろうと懐かしく感じて、万有（宇宙に存在するすべての物）に対して愛護の気持ちが湧いてきます。

2016年1月11日

## 古事記 現代語譯 古事記（8）

「宇宙の営みが自己のうちにあるのを感じ得るのが真の武道なのであります」（『武産合気』p.77）

この道文を読んでいて、「私の武産の合気は、宗教から出て来たのかということそうではない」と言われているのと意味するところが同じであると感じました。大先生が体得された真の合気の道は、宗教の教え（記紀などに根拠を置いた古神道の教義）から導き出されたものではなく、真の武道を究めようとして稽古・工夫を重ねた末に感得されたものです。そして、その感得された武道の奥義が宇宙の営み（古事記などに書かれている宗教の真理）そのものであったということです。

私達も稽古、研鑽を積んで、そのような気付き（感得）がある稽古にしたいものだと思います。また、合気道の理合や技法から見て古事記を読み解きたいと思います。

ところで、その奥義である、大先生がおっしゃられる古事記の営み（宇宙の営み）が古事記伝を読めば分かる程度のものであれば良かったのですが、靈界物語を副読本にしても分からないようなことも述べられているので、大先生がおっしゃられることは「ひじょうに分かりにくい」となってしまうのも否めないところです。それは、とりもなおさず、大先生が真剣に取り組まれた証でもあると思います。

これから解説する「右旋・左旋（螺旋運動、円転）」と「すみきり」は、そのような色合いが濃いものです。

吉祥丸二代道主が「円転の理」と名付けられた合気道の動きの右旋、左旋運動は中国武術の動きにヒントがあったかもしれないと思っています。

大先生が中国の八卦掌を学ばれたという説が取り上げられています (Aikido Journal “The Elusive Chinese Influence on Aikido,” by Stanley Pranin <http://blog.aikidojournal.com/2012/09/18/the-elusive-chinese-influence-on-aikido-by-stanley-pranin/> 参照)。八卦掌であったということまでは同意できなくても、大先生が満州や蒙古で目にされた中国武術の舞のような動きがヒントになっているということは考えられることです。大先生が中国で柔術を教授されたことが『入蒙記』に記録されているので、そのような時に彼の地の武術を目にすることがあったかもしれない、と私は思います。

「さうして守高（大先生）は王連長や王参謀に暇あるごとに柔術を教授してゐた。守高に柔術を学ぶものは支那将校の中四五名はあつた」（『霊界物語』NM-4-24）

この合気道の技を特徴づけている円転、螺旋運動は古事記のこの箇所には記述がなく、前に示したように霊界物語に「高鉾の神は左旋運動を開始し、神鉾の神は右旋運動を開始して円満清朗なる宇宙を構造し給へり」と書かれています。

道文では、次のように述べられています。

「タカアマハラというは全大宇宙のことであります。宇宙の動きは、高御産巢日神、神産巢日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の行為により日月星辰（じつげつせいしん）の現れがここに存し、宇宙全部の生命は整って来る。そしてすべての緩急が現れているのです」（『武産合氣』pp.77-78）

高鉾の神・神鉾の神は、神漏岐（かむろぎ）命・神漏美（かむろみ）命のように男神・女神（陽と陰）を意味する総称的な神名のようで、高御産巢日神・神産巢日神の亦の名ではありません。それで、大先生が拠り所にされたのは霊界物語そのままよりも大石凝真素美の『眞訓古事記』や『弥勒出現成就経』の次の部分ではなかったかと思えます。

「かく天地が成り定まる時は、其の地球の中心より上へ天球の底に向ひて、右旋して登り行く機が起る也。是を高御産巢日神と申す也。是と同時に、天球の底より下に左旋して、地球の中心に旋り入る機が起る。是を神産巢日神と申す也。高御産巢日と云ふは、下より上にむすぶ義（こころ、意味）也。神産巢日と云ふは、上より下にむすぶ義也」（『眞訓古事記』）

「然り而して 中心なる地球より 右に螺旋して 天底に昇騰する 氣機あり。其名を高皇産霊の神と謂ふ矣。亦天底より 左に螺旋して 地球に降り着（つ）く氣機あり。其名を神産霊（神皇産霊）の神と謂ふ矣。然り而して経緯 輪廓 條理 脉絡 明細に組織し、極然として彌縫（弥縫、びほう） 紋理する矣」（『弥勒出現成就経』）

勿論、霊界物語もこれらの大石凝真素美の本をベースにしている（これらの本の内容が出口王仁三郎聖師の頭の中に刻み込まれていた）と思います。

右旋・左旋について、なぜ右旋が昇りで左旋が降りになるのかということは後に詳述するつもりですが、古事記のこの箇所には螺旋運動のことは書かれていません。大石凝真素美は、明治まで生きていた人ですから、科学的知見である天体が渦を巻いていることからヒントを得たのかかもしれませんが、ムスビ（産霊）によって宇宙が創られることを考えての説明になっています。ここは神名を『日本書紀』から取って高皇産霊、神皇産霊の神と書いた方がこれらの神々の働き（ムスビ）を表していて分かり易いと思い

ます。造化の神ですので、このようなムスビの働きに関する考えが出てきても不思議ではありません。大先生は、その動きが武産合気（ムスビの武）の理や動きと同じであるということで説明されていることが分かります。

合気道の理合ということにスポットを当てて見ると、大先生が古事記の中に書かれていることの諸々を取り上げてその理合を説明されても、この「ムスビ」という一つのものにまとまって来るように思います。私達もそう思って読むと理解出来るようになると思います。

例えば、「これが武産（たけむす）合気の『うぶすな（産土。うぶすは誤り）』の社（やしろ）の構えであります。天地の和合を素直に受けたたとえ、これが天の浮橋であります」（『合気神髓』p.69）ですが、産土の社の構えが天地の和合（ムスビ）を素直に受けた構えで天の浮橋に立つことである、とおっしゃられています。この産土神のご神徳が万物を生み成せる産霊（ムスビ）の力であることを考え併せると、大先生が説明されていることの意味が良く分かって来るのではないのでしょうか。

この螺旋運動は「すみきり」という合気道の理合とも関連しています。合気道の稽古や理合から解釈して、古事記の営みに対する理解の度合を深めましょう。

2016年1月31日

#### 古事記 現代語訳 古事記（9）

古事記伝の「此の三柱（みはしら）の神は みな獨神（ひとりがみ）成りまして み身を隠したまひき」は「この御三方は皆お獨（ひとり）で御出現になつて、やがて形をお隠しなさいました」ですが、霊界物語では「この三柱神者（みはしらのかみは）並独神成坐而（すになりまして）、隐身（すみきり）也」（『霊界物語』13-0-3）と読んでいます。

ここでも、元は大石凝真素美がそう読んだからのようです。

「此の天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神 此の三柱の神が獨神（す）に成りまして隐身（すみきり）玉ふと申す」（『眞訓古事記』）

どちらで読んでも同じような意味ですが、「この三柱の神は すになりまして すみきりなり」と読むと少し動きが出て来ます。

眞訓古事記には次のように書かれています。

「又 す み き り 玉ふといふ四聲に澄極（すみきり）と描く時は 只 獨が澄む事となる。又 住極（すみきり）と書く時は 動物が巢に久しく住み極（き）り居る事のみに聞こゆる也。又 炭切（すみきり）と描く時は 仕事となる。此のすみきりといふ事は 蜻蛉が宙宇に中（すま）して 敢て進退上下左右せず 唯 中して居るを能く見る時は、其の四枚の羽を紙の薄さ程に扇ぎて 空気を叩いて居る也。是を 嗚呼善くすみきりて居るトンボ哉と云ふ也。又 善き獨樂を廻して 其の獨樂が風を起こしつゝ盛に廻り居りて 敢て飛び走らず、唯 一所に止まりて隆々（るる）盛々（るる）と廻り居るを よくすみきり居る獨樂也と云ふ類の、其の動き目が敢て目立たざるを以て、すみきり居ると云ふ也。古事記の爰（ここ）にすみきり玉ふと云ふは、此の三柱神はスに鳴りまして 極乎恒々烈々として、現在 大造化を行ひつゝ天上天下億兆萬機の往來を一身に保ちて、晝夜を止めず萬機を運轉し玉ひつゝ居玉へども、其の全部を見る事は敢て能はず。愚者は此の天球、地球の大造化の極乎恒々たるを見て 一種の器械の如くに思ひ居る也。

かゝる大々活機を日本語に 唯 四聲に収めすみきり玉ふといふ也。此の四聲に正當する字は決してない故に、衆人は 唯 鼻頭の一少部分許りを見て居る也。其の全身は隠れて居て決して見えないといふ事を

示す為に 隠身の二字を用ひる者なり」

したがって、まったく隠れられて何もされていないのではなく、現在も右旋・左旋され造化の業を行われているという意味が強くなります。

大先生は、それを「大神は一つであり宇宙に満ちみちて生ける無限大の弥栄（いやさか）の姿である（『合気神髄』p.110）」と、現在も造化の業を行われていることを「弥栄」という言葉で表わされています。

「すみきり」を、合気道では「独楽（こま）が最高にフル回転しているさい直止しているごとく映るのと同様に、<気・心・体>が一如となって自在に発動されつつある時には無心無我、魂が静かに澄み切つてある状態に達することをいう」（『植芝盛平 生誕百年 合気道開祖』p.20）と捉えています。眞訓古事記にある独楽（獨樂）の説明と同じです。

これは吉祥丸二代道主による説明ですが、大先生もそうおっしゃられていたのだと思います。

「独楽が最高にフル回転している」から類推すると、この理合は次の道文に関係しています。

「自分の中心を知らなければなりません。自分の中心、大虚空（皆空）の中心、中心は虚空にあるのであり、自分で書いていき、丸を描く。…きりりっと回るからできるのです」（『合気神髄』p.154）

心の状態や意識に関わる理合ですが、体的な技法や鍛錬法としても成り立ちます。「すみきり」を、心を澄ました無念無想とだけ捉えずに、現在も造化の業（愛の働き）を行われていると意味を拡大して、万有愛護の精神が溢れるものと受け取るべきでしょうか。

今年の箱根駅伝を制した青山学院大学が、コアトレーニング（身体のコア<核>となる脊柱<体幹>に近い部分から意識的、優先的に鍛えるトレーニング方式）を取り入れていることはよく知られていることです。参考になるかと思います。大先生の「自分で書いていき」とコアトレーニングの「意識的」という部分が共通しています。神経伝達から考えても、脊柱に近い部分の筋肉に命令が達するのに要する時間の方が手足の末梢部に達するまでの時間よりも短いので、コアを意識したりコアから動いた方が、動きが早くスムーズになると肯けるところです。

この「すみきり」は次の道文に出ています。

「そして常在（すみきり）、すみきらいつつすなわち一杯に呼吸しつつ生長してゆく」（『合気神髄』p.111）  
霊界物語の相当する部分も、もう一度併せてお読み下さい。

「天もなく地もなく宇宙もなく、大虚空中に一点の、（ほち） 忽然と顕れ給ふ。このゝたるや、すみきり澄みきらひつつ、次第々々に拡大して、一種の円形をなし、円形よりは湯気よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の気放射して、円形の圏を描きゝを包み、初めて◎（ス）の言霊生れ出でたり。この◎の言霊こそ宇宙万有の大根元にして、主（ス）の大神の根元太極元となり、皇神国（すめらみくに）の大本（だいほん）となり給ふ」（『霊界物語』73-1-1）

「すみきり」を「常在」と書くときは、次第次第に拡大して、元の雲や霧などの水の粒子がより微細になって全体に散らばって（満ち満ちて）存在している状態を指しています。一方、「澄みきり」と書けば、霧や雲の蒸気が拡散して晴れ渡った青空が現れたイメージです。

大先生が「常在」を当てられているので、「（宇宙）一杯に」ということを表現されていることが分かります。

次に「すみきらい」とは何でしょうか？

長い間、私には漢字でどう書くのか良く分かりませんでした。それで、思い付いて古語辞典を開いてみました。古語辞典には「霧（き）らふ《上代古語》」があって、霧や霞が一面に立ちこめるという意味でした。それで、「すみきらい」は「澄み霧らひ」という古語だと思います。

霊界物語には、他に「澄切り澄渡りつつ」とか「澄みきり澄み徹（とほ）らひつ」という表現も見られます。

「すみきり、すみきらいつつ」は即ち「一杯に呼吸しつつ生長してゆく」ことで、ムスビの働きを表しています。合気道のムスビは、「腹中に吸収して（すになりまして）、同化・一体化する（すみきりなり）」ということになります。このようなことを見いだされて（道文にはそこまでは書かれていませんが）、大先生は法悦の涙を流されたのではないかと思います。

「昔、この世界の一番始めの時に、天で御出現になった神様は、お名をアメノミナカヌシの神といいました。次の神様はタカミムスビの神、次の神様はカムムスビ（カミムスビ）の神、この御三方は皆お獨（ひとり）で御出現になって、やがて形をお隠しなさいました」と、たったこれだけの短い文章の中に合気道の大切な理合や動きが述べられています。

古神道の神道理論を打ち立てられた方々が古事記の中に宇宙や地球の成り立ち、即ち神の御業（宇宙の営み）が書かれていると考えたように、大先生が見出された真の合気の道の理合や技法が古事記に書かれているというのが大先生のお考えです。

もう一度、大先生の言葉を味わってみましょう。

「無性（むしょう、魂、実体のないこと）と有性（うしょう、魄、実体があること）の大原則ことごとく宇宙の営みの元を生み出した。それが合気の（理合や技法の）根元となる。つまり、（そのことが書かれている）古典の古事記の実行が合気である」（『合気神髄』p.19）

このすみきりは、次の段の「天からの階段にお立ちになつて（天の浮橋に立たして）」とも関連しています。

2016年2月20日

## 古事記 現代語訳 古事記（10）

次に「島々の生成」に移ります。

「そこで天の神様方の仰せで、イザナギの命・イザナミの命御二方に、「この漂っている國を整えてしつかりと作り固めよ」とて、りつばな矛をお授けになつて仰せつけられました。それでこの御二方の神様は天からの階段にお立ちになつて、その矛をさしおろして下の世界をかき廻され、海水を音を立ててかき廻して引きあげられた時に、矛の先から滴（したた）る海水が、積つて島となりました。これがオノゴロ島です」

前段までは天地開闢（かいびゃく）とか天地剖判（ぼうはん）とかいわれる部分でした。

「島々の生成」は、聖書では「神言たまひけるは 天の下の水は一處（ひとところ）に集りて 乾ける土 顯（あらわる）べしと 即ち斯（かく）なりぬ」（創世記1章9節）に相当するといつて良い部分です。

「整えてしつかりと作り固めよ」は「修理固成」で、古事記伝では「つくりかためなせ」と読んでいま

す。道文では音読みで「しゅうりこせい」です。

「合気道は『小戸の神業』で、ちょうど、那岐（なぎ）、那美（なみ）二尊が地球修理固成、すなわち伊邪那岐（いざなぎ）、伊邪那美（いざなみ）と高御産巢日（たかみむすび）、（神産巢日（かみむすび）、この部分脱落 p.64 参照）の神さまが化身されて地球修理固成された道なのです。…これを禊を通して導いていくのです」（『合気神髄』 p.50）

「合気道は、真の日本武道であります。それは地球修理固成に神習いて、布斗麻邇（ふとまに）の御霊（みたま）から割れ別れし水、火をいただいて、研修のすえ出生する魂の気を、人類のうちに現わしていくことであります。すなわち合気道は『小戸の神業』をいただくのがもとであります。合気道は宇宙の大虚空の修理固成です。世の始まりの霊を生み出して、さらに進んで天地の修理固成、高御産巢日（たかみむすび）、神産巢日（かみむすび）の神、地球修理固成で伊邪那岐（いざなぎ）、伊邪那美（いざなみ）の神に化身いたしました。そして有性、無性を問わず、宇宙の営みの大元素を、ことごとく御生みなされたのであります」（『合気神髄』 p.64）

修理固成の「修理」は、「壊れたり傷んだりした部分に手を加えて、再び使用できるようにすること、repair」ではなく、「手を加えて整えること、creation」です。それで「つくり」と読んでいます。聖書の「元始（はじめ）に神天地を創造（つくり）たまへり」（創世記 1 章 1 節）の「創造」に当たる言葉がこの「修理」です。

「固成」は「かためなせ」で、「完成させよ（成し遂げよ）」という意味です。

この修理固成の業は高御産巢日、神産巢日の神の業（産びの業）でもありました。

「（高御産巢日、神産巢日）二神は、至大天球一切をあまねく修理固成し、宇内（うだい）の系統を大成したまい、万有の根（こん、源くみなもと）となるべきものを悉く産み出し給うなり」（『武産合氣』 p.94）

「島々の生成」の部分では、高御産巢日、神産巢日の二神が伊邪那岐、伊邪那美の二尊に化身して（身を変えて）御業をなされているので、天地開闢と同様、右旋・左旋によってなされると受け止めると大先生の意味されるところが分かって来ます。「海水を音を立ててかき廻し」は古事記伝では「塩 コヲロコヲロにかきなし」で、このコヲロコヲロ（コロコロ）という擬態語にその運動の様子が示されています。

道文の「小戸の神業」、「禊」については後に出てきますので、詳しくはそこで触れますが、宇宙と一体となって悉くを万有愛護の心（気）で満たすのが禊で、小戸の神業です。

「天からの階段」は古事記伝では「天浮橋（あまのうきはし）」で、大先生は、これを「アメノウキハシ」と読まれ、次のとおり言霊解を与えておられます。

「天（あめ）の浮橋（うきはし）についていえば『ア』は自ら、『メ』はめぐる。『アメ』は愛、アミ、アーメンにみな通じる。…『ウ』は浮にして縦をなし、『ハ』は橋にして横をなし、二つ結んで十字、ウキハシで縦横をなす。その浮橋に立たなして合気を産み出す。これを武産（たけむす）合気といいます」（『合気神髄』 pp.128-129、p.151 も同）

「最初は天の浮橋に立たされてというところから始めなければなりません。天の浮橋に立たされて、『ア』は自ら…、「メ」は巡ること。自ら巡るを天（あめ）という。水火を結んで火は水を動かし（註 霊主体従：火＜霊＞によって水＜身、体＞を動かす）、水は火によって働く。それでこの理によって指導せ

ねばなりません」(『合気神髄』 pp.99-100)

「ア」は吾(あ)、即ち自(おのずか)らで、「メ」は巡るですから、天の浮橋に立つということは「すみきり」の状態、正中線(中心軸)を縦にして、自分の心に相手を包むような平らかな(横)気持ちで立つのです。

「また合気道は天(あめ)の浮橋(うきはし)に立たねばなりません。…すなわち和の魂(註 相手を包むような愛の気持ち)の錬成をするのであります」(『武産合気』 p.65)

合気神髄 p.99 の「水火を結んで火は水を動かし、水は火によって働く」は出口王仁三郎聖師からのものです。

「火は水の力に動き 水は火の力によりて流動するなり 何事も水のみにしてはならざらむ 火の助けこそ水を生かすも 火のみにていかで燃ゆべき 光るべき 水の力をかりて動くも 火と水の言霊これを火水(かみ)といひ また火水(ほし)と言ふ 宇宙の大道 水と火の言霊合して水火(しほ)となり 宇宙万有の水火(いき)となるなり 火と水は即ち火水(かみ)なり 水と火は即ち水火(しほ)なり 陰陽の活動 水と火の活用によりてフの霊(みたま、『霊界物語』13-1-1 及び 73-1-6「フの言霊」参照)即ち力(ちから)あらはるるなり…火と水を塩梅(あんばい)なして世に出づる 伊都能売神(いつのめのかみ)の活動(はたらき)尊し…火と水の二つの神業ありてこそ 天地活動次ぎ次ぎ起る」(『霊界物語』73-1-12)

「火は水を動かし」と「水は火によって働く」は、技では「魂(火、霊、心)によって魄(水、体、身)を動かす」(『合気神髄』 p.131)ということです。

2016年3月11日

#### 古事記 現代語譯 古事記(11)

水は横に流れ、火は縦に燃え上がる性質を持っているとするのが大多数の言霊学者の考えですが、大本教はこれと逆です。天の浮橋に立つという大先生の教えは、水(体、身)を縦にし火(霊、心)を横にするということで、大変重要なものですが、大先生も大本に行かれなければこの発想は出て来なかったのではないかと思います。

「スの言霊は鳴り鳴りて、遂に大宇宙間に火と水との物質を生み給ふ。そもそも一切の霊魂物質は何れもスの言霊の生むところなり。しかして火の性質は横に流れ、水の性質は縦に流るるものなり。故に火は水の(補足 縦に伸びる)力によりて縦にのぼり、また水は火の横の力(註 横に伸びる力)によりて横に流る。昔の言霊学者(げんれいがくしゃ)は火は縦にして、水は横なりと言へれども、その根元に至りてはしからず、火も水なければ燃ゆる能はず光る能はず、水もまた火の力添はざれば流動する能はず、遂に凝り固まりて氷柱(ひょうちゅう)となるものなり。冬の日の水は火の気の去りし水の本質なり、この理によりて水は縦に活用をなし、火は横に動くものなる事を知るべし」(『霊界物語』73-1-12)

この考えは、山口志道の水穂伝からのものです。

「息(いき)胞衣(えな)の内に初(はじめ)て吹(ふく)を号(なづけ)て、天浮橋(アメノウキハシ)といふ。言(いふ)心は、アは自(おのづから)と云ことなり。メは回(めぐる)ことなり。ウキはウキ・ウクと活用(はたらき)、ハシはハシ・ハスと活用(はたらく)詞(ことば)にて、ウは水にして豎(たて)をなし、則①(ウキ)なり。ハは火にして横をなす、則、㊦(ハシ)なり」(『水穂伝』火之巻一)

これらの記号は「布斗麻邇御霊(ふとまにのみたま、御霊は御霊)」の図にあるもので、山口志道が荷

田訓之から伝えられた「稲荷古伝」の形を用いてその意味を解いたものです  
(<http://kotodamart.eco.coocan.jp/mizuhonote02.htm> 参照)。

なお、霊界物語の次の箇所（下線部）は間違っているようです。大本教の霊界物語に詳しい方に確認しましたが、どうして違っているかは分からないとのことでした。

「イザナギの命の御名義は、大本言霊（おほもとことたま）即ち体（註 本体、本質）より解釈する時は、イは氣（いき）なり、ザは誘（さそ）ふなり、ナは双（ならぶ）ことなり、ギは火にして即ち日の神、陽神なり。イザナミのミは水にして陰神なり、いはゆる氣誘双神（いざなみのかみ）と云ふ御名であつて、天地の陰陽双びて運（めぐ）り、人の息双びて出入の呼吸（いき）をなす、故に呼吸（いき）は両神在（いま）すの宮である。息（いき）胞衣（えな）の内に初めて吹くを号（なづ）けて天浮橋（あめのうきはし）と云ふ。その意義はアは自（おのづか）らと曰（い）ふこと、メは回（めぐ）ることである。ウキはウキ、ウクと活用（はたら）き、ハシはハシ、ハスと活用（はたら）く詞（ことば）である。ウは水にして㊦（うき）也。ハは水（ママ、火の間違い）にして横をなす、即ち㊧（はし）である」（『霊界物語』10-2-27）

古事記などにある那岐・那美二尊が天の浮橋の上に立って島生み、神生みの修理固成の業をなされたように、大先生は、合気道においても最初に天の浮橋に立たねばならないと教えられています。そこから生まれてくるものが武産合気（註 ムスビによる武技で、それにより技がどんどん産み出される武道）になるからです。

「この道は、天の浮橋に最初に立たなければならないのです。天の浮橋に立たねば合気は出て来ないのであります」（『合気神髄』p.26）

「この合気も、また天の浮橋に立ちまして、そこから、ものが生まれてくる。これを武産合気といいます。「オ」の言霊（『霊界物語』6-5-28 立花の小戸のあはぎが原に鳴る おこゑ を天の浮橋といふ）、「ウ」の言霊、これは天の浮橋……。言霊とはひびきですから、宇宙のひびきをことごとく身の内に受け止めるのです。それで霊界をこの人の鏡に映しとる」（『合気神髄』p.27）

「オ」の言霊（註 下に大地に降ってオの言霊が生まれる）は地ですから大地に真っ直ぐ立つこと、「ウ」の言霊は結ぶ（宇宙のひびきをことごとく身の内に受け止める）ことと理解して良いと思います。

この天の浮橋に立つということは2012年10月2日～2014年4月23日のブログにまとめてありますが、概念的には空間と時間（宇宙。宇：空間、宙：時間）の中心に立つことです。大先生が「私の真の姿を認めてくれたのは、五井先生と出口王仁三郎聖師だけだ」とおっしゃられた白光真宏会の五井昌久先生は、天の浮橋に立つということについて「タテ、ヨコ十字交差の真中に立つ、ということですよ」と言われ、「この言葉はピッタリあてはまらないのだけれど、無限次元の中心というところかな」と言われたそうですが、そのとおりだと思います（<http://www1.vecceed.ne.jp/~kyusei/sub47.htm>）。三次元の空間だけでなく、過去・現在・未来の中心にも立つのです。

想念（自己の思い）の世界でのことだと思いますので、これは何だろうというところから始めて、技の中で工夫して行けばと思います。

「我々は魂の気の養成と、また、立て直しをしなければなりません。合気は宇宙組織を我が体内に造りあげていくのです。宇宙組織をことごとく自己の内に吸収し、結ぶ。そして世界中の心と結んでいくのであります。仲よく和と統一に結んでいくのです。……すべては結びでやる。それでないと本当の強さは出てきません。それでないと皆さんの稽古が無駄になってしまうのです。

それには合気道は天地の合気、神武以前の天と地を結んでしまうのであります。声なき声をもって、魂

の気を組織しなければいけません。天の浮橋、舞い上がり舞い下がるころの気を動かすことが肝要です。地球の動きでもそう。天運循環して、ここにはじめて教えの中心があるのであります。その中心はどこにあるかといえば、自己にあるのです。智恵正覚を満天に豊満して、本当の力をもって一飲みにしてかからなければ本当の合気は難しいのです」(『合気神髄』 pp.28-29)

「合気の仕儀は、宇宙の気、淤能碁呂島の気、森羅万象の気を貫いて、息吹して、そしてこの三界を守り、かつは大地の息に己の息を合わし、息において生み出す。言霊の妙用の息を私の行によって悟ってともに。気のみわざ 魂(たま)の鎮(しず)めや禊技(みそぎわざ) 導きたまえ 天地(あめつち)の神」(『合気神髄』 p.92)

「天の浮橋に立った折には、自分の想念を天にも偏せず、地にも執(つ)かず、天と地との真中に立って大神様のみ心にむすぶ信念むすびによって進まなければなりません。そうしませんと天と地との緒結び、自分と宇宙との緒結びは出来ないのであります」(『武産合気』 p.72)

空間だけでなく時間ともなるとなかなか概念がまとまらないかもしれませんが、量子力学的な捉え方をして波動とか波動エネルギーで考えれば、空間・時間の中心と広がりを持った空間・時間との連続性が理解しやすくなるのではないかと思います。

「大地に真っ直ぐ立つ」ということについては、俳優の榎木孝明さんがオーラの泉で「正中の理」を説明されているので参考になると思います。[古武術]の所を見て下さい。

<http://aura.happy-life7.com/a/8b.html>

また、次の「正中線とは何か？」ももう少し進んだ人のためになると思います。

<https://www.youtube.com/watch?v=7CyqGrvKo8I> (正中線とは何か？ 正中線の正体とは)

2016年3月31日

## 古事記 現代語訳 古事記(12)

「天地の為に心を立つ、生民の為に命を立つ、往聖(去聖)の為に絶学を継ぐ、万世の為に太平を開く」という北宋の儒家 張横渠(ちょう おうきょ)の言葉がありますが、「去聖のために絶学を継ぐ」ということが出来るので、大先生は、疑いもなく直弟子ではない我々後世のために幾重にも重なる言葉で教えを遺されていると心得て、理解に努めたいと思います。

「なぜこのわしの教えることを筆記しようとししないのだ。油断するな。君ら内弟子たる者が身近において、このわしの話や教えというものを書き残し、記録しなければ、将来と後世にこの植芝の教えや心というものを誰が伝えるのだ！ これからは努めて記録するように。それが必ず君らの修業の糧となるであろう。そして、君たちにおいては武術の修業ばかりでなく、油断なく古今の聖賢の教えを尋ね、努めて心の修業と養成を自己の成長に課することが大切である」(『伝承のともしび』 pp.131-132)

そうするためには、大先生のように直接内流や間接内流を受け、稽古の中で想像力を働かせ、工夫して行くことだと思います。

直接内流とは、アウグスト・ケクレ(有機化学者)が1匹の蛇が自身の尻尾に噛み付きながら回っている夢を見てベンゼンの環状構造を思いついたのと同じように、夢やひらめき(直感や靈感)を受けることです。

間接内流とは、アイザック・ニュートン(物理学者、数学者、自然哲学者)がリンゴの木から実が落ちるのを見て万有引力の法則を思いついたように、何かを見たり読んだり、或いは人の話などからヒントを得ることです。

科学的なアプローチをするのであれば、「仮説を立てて検証する」を繰り返すことでしょうか。

「例えば、天地の真象をよく見て、自らこの真象によって悟る。悟ったらすぐに行く。行ったらすぐに反省し、という具合に順序をたてて、悟っては反省し、行っては反省するというようにして、だんだん向上していただきたい」（『合気神髄』 pp.164-165）

大先生が古事記や宗教の教えからイメージを膨らませて天の浮橋に立つという概念を形作られているので、この部分は我々もイメージを膨らませて自分のものにすることが肝要です。

「故に正覚にて自己の思ふままに天地 春夏秋冬 万有を利用し、又 万有の真性 姿態 言行も見直し、聞直し、清く善美に武技に直して達行する事を得、又 天地人和合のつるぎ（祭政一致の両刃の天の叢雲の神剣）と現はれ、自己の想ふままに自己を清練なすにあり」（昭和 13 年刊『武道』序文）

「オノゴロ島」は古事記の表記が「淤能碁呂嶋」で、古事記伝で「おのごろしま」と振り仮名が付いているものです。「自（おの）ずから（自然と）凝り固まってできた島」の意味なので、「自凝島とも表記されています。日本書紀では「礮馭慮島（おのころじま）」なので、「おのころじま」「おのころしま」という読み方もあります。

霊界物語では「自転倒嶋」又は「自転倒島」という字が当てられていて「日本」のことだとしています。

「それゆゑ日本国は、地球の良（うしとら）に位置して神聖犯すべからざる土地なのである。もと黄金（きん）の円柱が、宇宙の真中に立つてゐた位置も日本国であつたが、それ（竜体）が、東北から、西南に向けて倒れた。この（竜の形をした）島を自転倒嶋（おのころじま）といふのは、自（おのづか）ら転げてできた島といふ意味である」（『霊界物語』 1-3-21）

「いよいよ本巻より、古称自転倒島（おのころじま）すなはち現代の日本国内における、太古の霊界物語となりました」（『霊界物語』 16-0-1）

道文では「おのころしま」又は「おのころじま」と読まれ、「地球」と括弧書きがされています。川面凡児（神道家）が「自転（おのころ）島」と書き、球形にして自転をなす地球と捉えていたのと同じです。武道においては大地（地球）の上に真っ直ぐ立つということの重要性から、大先生は、おのころ島を日本ではなく地球とされたと思います。

「それで自分がみそぎのため、音声を言葉を、つまり自分の心のひびき、五音五感五行五元五臓五体の順序に、自己の魂の緒の動きは悉く宇宙にひびきつらぬき、又天地、オノコロ島（地球）にひびき、すべての国々、すべての万有万神にも自分の魂より発する処の言語も又、その魂の糸筋（魂の緒）のむすびによって、悉く人の思う通りに世界に通じることになる」（『武産合気』 pp.183-184）

「右足をもう一度、国之常立神（くにのとこたちのかみ）の觀念にて踏む、右足は、淤能碁呂島（おのころしま）、自転公転の大中心はこの右足であります」（『合気神髄』 pp.69-70）

「一切の力は気より、気は空に結んでありのままに見よ。箱の中に入れるな（註 目に見える体の中にだけ留まるとするな）。気は（体外にも出ていて）いながらにして淤能碁呂島（おのころじま）を一のみに出来る。気的自由を第一に悟れ。気の流れを知りつくせ」（『合気神髄』 p.131）

高天原（タカアマハラ）と淤能碁呂（オノコロ）の母音に着目したのは日月神示の岡本天明が最初のようですが、これらを天明に倣ってアイウエオ（天火結水地）に当てはめると全体像が分かって来ます。

ア（天）－高天原（宇宙） TA-KA-A-MA-HA-RA

イ（火）－天に近いもの（陽、魂、霊）

ウ（結）－産す MU-SU

エ（水）－地に近いもの（陰、魄、体）

オ（地）－淤能碁呂（地球） Q-NO-KO-RO

そして天の浮橋 A-ME-NO-U-KI-HA-SHI を見ると天火結水地の母音（A I U E O）をすべて含み、大先生によるここまでの説明はありませんが、「天地の和合を素直に受けたたとえ、これが天の浮橋であります。片寄りがない分です」（『合気神髄』 p.69）という道文の理解の助けになると思います。

「天の浮橋とは、火と水の十字の姿である」（『武産合氣』 p.48）

「天地の精魂凝りて 十字道（あいきどう） 世界和楽の むすぶ浮橋」

「天の浮橋、舞い上がり舞い下がるところの気を動かすことが肝要であります。地球の動きでもそう。天運循環して、ここにはじめて教えの中心があるのであります」（『合気神髄』 p.28）

「いづとみづ 十（あいき）と生りし黄金橋 富士（火）と鳴門（水）の仕組なるかな」

「そして天の浮橋にたたされたならば、全大宇宙と自分というものは別のものではなく、一つになっている」（『武産合氣』 p.102）

これで、この段の古事記の営み（古事記に書かれている宇宙の営み、運化、経綸）は「右旋・左旋運動（循環運行、天運循環、すみきり、自転・公転）」であることが分かったと思います。

大先生は、稽古の前に杖（じょう）を持って神楽舞を舞われました。それは天神楽（あめのかぐら）といわれているとおり、天の浮橋に立って「塩コヲロコヲロにかきなし」という所作を含むものです。この営み（動き）の共通性が大先生の天地と一体、神人合一を導き出すものになっています。それだけ、この部分の古事記の営みは合気道にとって重要なものです。

「私たちは頭（けん）、幽（ゆう）、神（しん）の三界にわたって、これを守り、行じてゆく責任があります。神楽舞の始め（start）は『天（あめ）の浮橋（うきはし）に立たして（お立ちになって）』という。水火のむすびであります」（『武産合氣』 p.187）

大先生は、天神楽を舞われることにより、水火のむすびの状態になられてから稽古に入られたと聞いています。

2016 年 4 月 20 日

## 古事記 現代語譯 古事記（13）

次に続くのが、成婚の段です。

「その島にお降りになつて、大きな柱を立て、大きな御殿をお建てになりました。

そこでイザナギの命が、イザナミの女神に「あなたのからだは、どんなふうにできていますか」と、お尋ねになりましたので、「わたくしのからだは、できあがつて、でききらない所が一か所あります」とお答えになりました。そこでイザナギの命の仰せられるには「わたしのからだは、できあがつて、でき過ぎた所が一か所ある。だからわたしのでき過ぎた所をあなたのでききらない所にさして國を生み出そうと思うがどうだろう」と仰せられたので、イザナミの命が「それがいいでしょう」とお答えになりました。そこでイザナギの命が「そんならわたしとあなたが、この太い柱を廻りあつて、結婚をしよう」と仰せられてこのように約束して仰せられるには「あなたは右からお廻りなさい。わたしは左から廻つてあいましょう」と約束してお廻りになる時に、イザナミの命が先に「ほんとうにりつばな青年ですね」といわれ、その後（あと）でイザナギの命が「ほんとうに美しいお嬢さんですね」といわれました。それぞれ言い終つてから、その女神に「女が先に言つたのはよくない」とおつしやいましたが、しかし結婚をして、これによつて御子 水蛭子（ひるこ）をお生みになりました。この子はアシの船に乗せて流してしまいました。次に淡島（あわしま）をお生みになりました。これも御子（みこ）の數にははいり

ません。

かくて御二方で御相談になつて、「今わたしたちの生んだ子がよくない。これは天の神様のところへ行つて申しあげよう」と仰せられて、御一緒に天に上（のぼ）つて天の神様の仰せをお受けになりました。そこで天の神様の御命令で鹿の肩の骨をやく占い方で占いをして仰せられるには、「それは女の方が先に物を言つたので良くなかつたのです。歸り降つて改めて言い直したがよい」と仰せられました。そういうわけで、また降つておいでになつて、またあの柱を前のようにお廻りになりました。今度はイザナギの命がまず「ほんとうに美しいお嬢さんですね」とおつしやつて、後にイザナミの命が「ほんとうにりつばな青年ですね」と仰せられました。かように言い終つて結婚をなさつて御子（みこ）の淡路（あわじ）のホノサワケの島をお生みになりました」

大きな柱は「天之御柱（あめのみはしら）」、大きな御殿は「八尋殿（やひろどの）」です。

合気道では、天之御柱は皆空（みなくう）の中心、自己の正中軸で、宇宙の中心と感得されるものです。八尋殿はムスビによって島生み、神生みを行われる建物で、武産合気の道場と理解して良いかと思ひます。道文に産屋とあるのも、この八尋殿から来ています。産屋はお産をするための小屋ですが、武産の武の場合、結び（産び）によって武を産み出す道場になります。合気道の産屋と固有名詞で呼ぶときは、合気神社の隣にある現在の茨城支部道場を指します。

したがって、これらは合気道の根本的な理合「結び」を示すものとして大変重要です。その理合が、天之御柱をイザナギの命が左から廻られ、イザナミの命が右から廻られた部分にも示されています。

大先生が古事記の営みによって合気道の理合や技法を説明されるのは、イエス・キリストが譬（たと）えによって教えや信仰のあり方について語っておられるのと同様、聞く者の理解力に応じて具体的で目に見えるように理解できるためだと思って下さい。

大先生の信仰が神道にあったからとかある特定の宗教にあったからと考えて理解しようとする眼を閉じてしまわないで、あるいは大先生が武道の秘密主義によって大切なことを隠されようとしているためだなどと諦めてしまわないことを願います。

「合気道の……〈ここでは結び〉とは、正に古事記の営みの……のようだ」と譬えられているのです。

「(古事記の) タカアマハラというは全大宇宙のことであります。宇宙の動きは、高御産巢日神、神産巢日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の行為により日月星辰（じつげつせいしん）の現れがここに存し、宇宙全部の生命は整って来る。そしてすべての緩急が現れているのです」（『武産合気』 pp.77-78）

「こうして合気妙用の導きに達すると、(古事記にあるように) 御造化の御徳を得、呼吸が右に螺旋して舞い昇り、左に螺旋して舞い降り、水火（魂魄、霊と体）の結びを生ずる、摩擦連行作用を生ずる。…この摩擦連行作用を生じさすことができこそ、合気の神髓を把握することができるのである」（『合気神髓』 p.87）

「また、地球修理固成は気の仕組みである。(即ち) 息陰陽水火の結びである。そして御名は伊邪那岐、伊邪那美の大神と顕現されて（右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞をされた）、その（それを）実行に移したのが合気、どんなことでも出来るようになってくる」（『合気神髓』 pp.88-89）

この結びは、手と手が触れる接触点や自分の臍と相手の臍とを結ぶ中間点で出来るものではなく、宇宙の中心、皆空の中心、自己の正中軸、即ち天之御柱を右旋して舞い昇る相手の気と左旋して舞い降る自

分（宇宙）の気との摩擦作用（註 包容同化といってもよい）によって生じるものです。相手の攻撃は、後ろ足で地を蹴って、その反発力を手（剣先、拳先）に伝えようとして上昇して来ます。それを受入れながら同時に相手を皆空の中心（腹中）に吸収する（結ぶ）と下降の気となって、これに相手が導かれ（連行され）下に倒れます。

八千代合気会の皆さんにはこれだけの説明で分かると思いますが、直ぐに分からなくても結構です。分からないなりに、ここから得られるイメージを大切に、摩擦連行作用とは何だろうかと考え、こうだろうか工夫を重ねて下さい。

そのイメージ作りのために、なぜ右旋が昇りで左旋が降りになるのかということについて図示しながら説明を加えます。

私が古神道を学んだ時に講師の先生から、気は右回りに昇って、左回りに降る、と教えてられました。大先生の話とぴったり一致しているので、その先生に、気が見えるのですか、と不思議に思ってお尋ねしたら、昇り龍、降り龍もそのように彫られているという答でした。また、樹木は右回りに上に伸び、雷は左回りに落ちるとも言われましたが、昇り龍・降り龍は必ずしもそのように彫られていないようです。植生も朝顔は上から見て左巻きです。

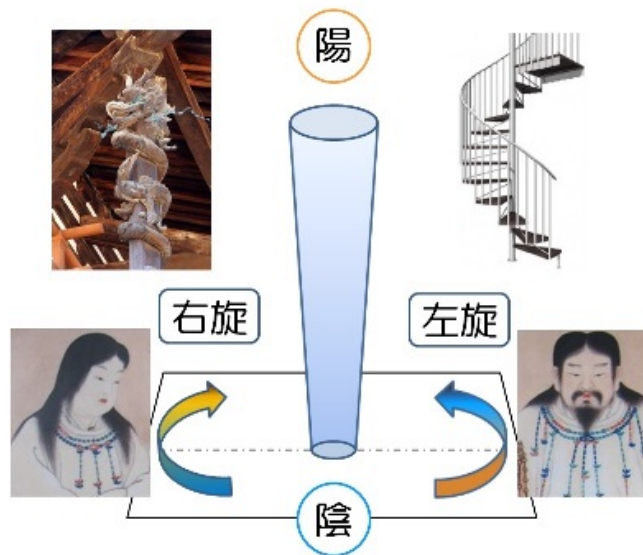
それで、これは古神道の解釈だと思い至りました。

右旋・左旋と上昇・下降の関係は古神道では常識のようで、『古神道入門』などを著わされている小林美元先生が「地の気は陰の気であり、天の気は陽の気である」、「地の気は時計回り（上から見て右回り）で上昇し、天の気は時計と逆回り（上から見て左回り）で下降するエネルギーである」と教えられています。

古神道の右旋が上昇で、左旋が下降というのは、陰陽五行説からではないかと思われます。

古事記の成婚は天之御柱を廻って行われましたが、平成 26 年(2014)に高円宮家の次女典子さまと、出雲大社権宮司の千家国麿さんがご結婚された時も天之御柱の周りを国麿さんは左回りに典子さまは右回りに廻られました。

この報道記事に基づいて右旋・左旋のイメージを絵にしたものが次の図です。右旋しながら上昇して、左旋しながら下降するとしたら図のような螺旋階段を昇降することになります。昇り龍も写真のものは右旋です。



気の交流：右に螺旋して舞い昇り、左に螺旋して舞い降り

このように陰の気は右旋して上昇し、陽となり、陽の気は左旋して下降し、陰となるということを、大先生が合気道の結びの説明に用いられています。

気功で、右回りの気はエネルギーの集中を左回りの気はエネルギーの開放を意味しているそうです。多田宏先生が大先生から受けられた印象のとおりではないでしょうか。

「ある時期、私（多田先生）は不思議なことに気がついた。先生（大先生）に近寄ったとたん、自分の心と体が何か透明な感じになる。そして先生に触れると、それはよりはっきりして、まるで自分と先生の心と体の境の区別が、無くなったような感じとなるのである。それは先生の修行で得られた、対峙を超えた心から生じる大きな気の力が、我々を包み込んだのであろう」

大先生が「スミキリ」と言われたりするもの、この回旋のイメージをお持ちだからと思います。

「腹中に吸収して」と言われるものは、左半身で入身すると相手が右回りに腹中に入ってきて、それを迎えて一体になって左回りに技を施すと摩擦連行作用によって相手が導かれて倒れるということかと思います。

この時、表層筋の動きだけに気を用いると上手く行かないと思います。脊柱にその名も回旋筋（深層筋）というものが付いていますが、深層筋から動くということも必要だと思います。この時の構えや足運びは「うぶすな（産土。「うぶす」は誤り）の社の構え」（『合気神髄』pp.69-70）で、この記述とも一致します。

この辺りまで考えを及ぼすと、大先生が古事記の営みで説かれるところは奥が深いと思います。各々の理解に応じてという所以かと思われます。

2017年1月11日

#### 古事記 現代語訳 古事記（14）

「あなたのからだは、どんなふうにできていますか」とお尋ねになられている部分は身体の構造的な面からの解釈もあるでしょうが、言霊学では「成成不成合處一處在（成り成りて、成り合はざる處、一處あり）」を「鳴り鳴りて、鳴り合はざる声」とし、「成成而成餘處一處在（成り成りて、成り余れる處、一處あり）」を「鳴り鳴りて、鳴り余れる声」と解釈しています。それで、鳴り余れる声と鳴り合はざる声とを合わせて五十音、七十五声、無量無辺（万のものを表す）の音声を生むのが、島生み・神生み

の業であるというのが言霊学の考えです。

出口王仁三郎聖師によれば、鳴り鳴りて鳴り合はざる声（アーといつまでも他の音に変化しない声）はア声で伊邪那美の命、鳴り鳴りて鳴り余れる声はウ声で伊邪那岐の命とされています。

『古事記』三卷、其解釈法は高低深淺種々に分れて、十有二種にも達するが、最も高遠なる解釈法は、一部の言霊学書としての解釈である。伊邪那岐、伊邪那美二神が島を生み、国を生み、山川草木風雨等の神々を生むということも、そはただ表面の辞義であつて、内実は五大母音（アイウエオ）の発生から、五十正音の発達を説き、更に語典、語則の綱要を説明して居るので、言わば一部の言霊学教科書なのである。

言霊学より岐美二神の働きを解すれば、伊邪那美の命は鳴り鳴りて鳴り合はざる声、即ち『ア』声である。又伊邪那岐の命は鳴り鳴りて鳴り余れる声、即『ウ』声である。岐美二神は、各々『ア』『ウ』の二声を分け持ちて、一切の声を産み出し玉うので、いやしく音韻学上の知識ある人は、一切の声音が此の二声を基本とすることは熟知する所である。二大基礎音が一たび増加して五大母音となり、二たび増加して五十正音となり、三たび増加して七十五音声となり、四たび増加して無量無辺の音声となり、同時に森羅万象一切は成立する」（『大本略義』理想の標準）

ウ声の場合、ウーと鳴り合はざる声にもなると思いますが、ウアでワ声に変わるので鳴り余れる（他の音に変化する）声としています。

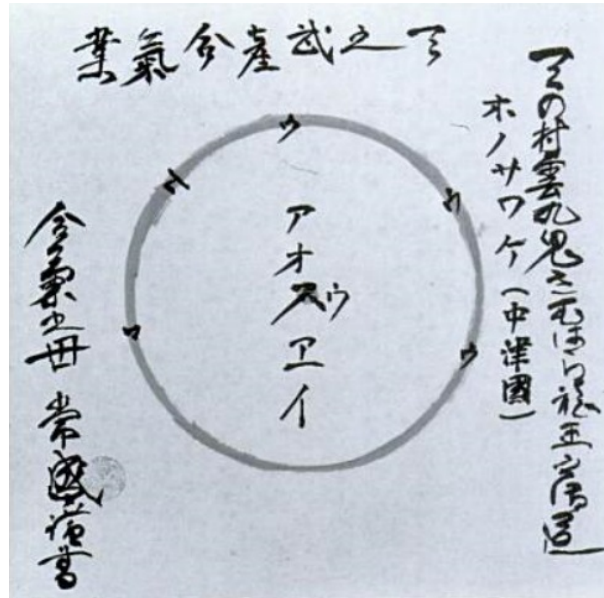
「鳴々而（なりなりて）鳴合はざるはあの声ぞ 鳴余れるはうこゑなりけり うあのこゑ正しく揃ひて結び合ひ 変転（はたらき）するは美斗能麻具波比（みとのまぐはひ） うあの声結びてわ声に変化（はたら）くは 阿那邇夜志愛上袁登古袁（あなにやしえーをとこを）といふ」（『霊界物語』6・5・28）

それで、伊邪那美の命から声を出された時、アウとなって他の音声に変化しなかったのが、伊邪那岐の命から声を出し直されてウアとして淡路のホノサワケの島をお生みになられています。

島生みはこの淡路のホノサワケの島が最初で、続いて伊豫の二名の島（いよのふたなのしま）を生まれますが、言霊学では淡路のホノサワケの島の言霊（ム声）が分かれて伊豫の二名の島の言霊（ミメモマの四声）になるというように、次々と島（言霊）が生み出されて行きます。

「淡道之穂之狭別島（あはみちのほのさわけじま）といふは 鳥うゆ（む声）と結ぶ言霊 伊予之国二名島といふ意義は 母音む声（註 大本言霊学ではアオウエイを五大父音〈ふおん〉という）にい（声）を結び み声（伊予国愛比売）に変化し むゑ結び め声（讃岐飯依比古）に変化し むおを結び も声（阿波国大宜津比売）に変化し むあを結び まごゑ（土佐国健依別）に変化す この故に むごゑの父音（註 イエオア）みめもまの 四声に変化を身一而（みひとつ） 面四有（おもよつあり）と称ふなり」（『霊界物語』6・5・28）

大先生は、ホノサワケが豊葦原の「中津國（高天原と黄泉の国の間にある国）」とされています。通常、中津国は日本の国土のことを指しますが、大先生は、「天の浮島」という表現をされ、天の浮橋と同じ意味で使われています。「合氣之母 常盛謹書」と書かれた「天之武産合氣業」図から、「天の村雲九鬼さむはら龍王（が示されたところ）之御道」で、ムスビによる「天之武産合氣業」をホノサワケとされていることが分かります。



2017年7月19日

# 古事記 現代語譯 古事記 (15)

「淡道之穂之狭別島（あはみちのほのさわけじま）といふは 鳥うゆ（む声）と結ぶ言霊『靈界物語』6-5-28）と出ていますが、「鳥うゆ（む声）」は「淡道之穂之狭別島」の霊返し（註 たまかえし、言霊を約めること。例：フジの霊返しはヒなり）ではなかろうか、というのが大本の方のご意見でした。「鳥（う）」と次の「う」は表記が違うので、王仁三郎聖師によると、最初のウと2番目のウは、違うウなのだそうです。この部分は「淡道之穂之狭別島」と称えると、「ウウユ」となり、最後は「ム声」になりますというような、「…になる」「至る」というのが自然で、「結ぶ」に近い表現かと思っています、と教えて下さっています。

「天之武産合氣業」図と同じ言霊で示されているのは、「スーウウウユーム 淡道之穂之狭別（あわじのほのさわけ）の行という」（『武産合氣』p.89）です。

◎（ス）からウが生まれ、ウウユームと、最期に結ぶ言霊（ム声）に至って、このムスビによって島々の生成（産み出し）が行われるところが武産合気の技の産み出しと同じなので、大先生が取り上げられているようです。これらの言霊の意味は詳しくは分かりませんが、次の部分が参考になるかと思います。「大虚空一点の、（ホチ）あらはれて スの言霊は生れ出でたり … 主の神の初声（うぶごゑ）にあれし言霊は 宇迦須美の神のウ声なりけり … 一さいの真中にまして万物の 根本にますスの言霊よ … むしわかし結び連ぬる活動は ムの言霊の活用なりけり 穩かに強き弱きを引きならす 功（いさおし）はユ声の言霊なるも … ワ行ウの生言霊は生み生みて 生みの果しを守らす神なり」（『靈界物語』73-1-6）

「ウ列は森羅万象の結びに居り

（中略）

ムームーム ム結びの神業の鳴り鳴りて 今生（あ）れまさむ国魂の神

ユューユュー ユ白雪よりも清らけき 畏き御子の生れます今日（けふ）はも」（『靈界物語』75-2-8）

恐らく簡略化したものだと思いますが、合気道新聞 第90、98、99、104号には「ウーユームー」「すーうーゆーむー」「すーうーゆーむ」と書かれている箇所があります。

「言霊と云うのは宇宙組織のひびきのことをいうのであります。スーウーユームー、これをホノサワケ

の島というのです」（『合気神髄』 p.29）

「合気は和と統一に結んでいくのである。…これは良（うしとら）の金神の神の御教（みおし）え、そして小戸の神業で、真人養成の道である。ホノサワケの島。天の浮島（註 ホノサワケの島）というのは…自ら巡るというのが天の、浮島の方は…二つのものが水火結んでいく、霊界も顕界も一つにする。（天のは）アオウエイという天の御柱（みはしら）、（浮島は）スーウーユームー（と水火の結び）合気は気の仕組み、魄と魂、魄は宇宙組織の魂の糸筋を磨いていく、魂に神習うていく己れの岩戸開きである。…いつも我々は気を通して魂を磨く。そして太古の昔に舞い戻って太古から立て直しをする」（『合気神髄』 pp.140-141）

「天之武産合気業」図には、吉祥丸二代道主が次のような解説を付けられています。

「大先生は、合気道という武道がそのように、心性的にはもっぱら「言霊」により「業」となって産み出されるものと解し、『古事記』にいうところの産霊（むすび）の思想にもとづいて「武産（たけむす）あいき」と称することを好んだ。「天之武産合気業」図において「ホノサワケ」なる語が見えるが、これは『古事記』の国産みと関連する「穂狭別（穂之狭別）」の意であり、要するに産霊をさす。また「合気之母」と自称する語が見えるが、これも産霊を念頭においての謂（いい）であろう」（『植芝盛平生誕百年 合気道開祖』 p.11）

愛の言霊「ス」によって結び（相手を腹中に吸収し）、一体となって導く業（技）を産み出すことを武産合気といい、それを「天之武産合気業」図に示されたのだと思います。

「むすび」について、安岡正篤著『日本の伝統精神：この国はいかに進むべきか』に次のように説明されています。

『しからば神むすびの神の本質・使命というものはどういうものであるか、という事になりますと、これは深い神道上の「神ながらの道」の問題であります、かいつまんで申しますと、いうまでもなくこれは「むすびの精神、むすびの道」の一つの代表であります。

「ムスビ」とは糸ヘンのあの結びという字を書き、これを古典に徴（ちょう）しますと、「霊を生む、魂を生む、産霊（むすび）」という字を当てはめたり、これを具象化して、鳥の巣を太陽が暖かく照らして、そこに卵が孵化（ふか）する。「産（う）む」という字と、鳥の「巣」という字と、太陽の「日」という字とを並べて「産巢日（むすび）」とも書いてある。

それらによってもわかりますように、創造（creation）即ち生命を生み、いろいろの力や業を作り上げてゆく働き、これを「ムスビ」というのであります。

今日の科学によっても明らかでありますように、孤立単独では何物も生まれませぬ。原子と原子とが結びつかなければ（核融合）それは大きな力にはならない。核分裂の原子力もあるではないかと言いますが、これは分裂の奥に融合があるから、分裂の力にもなるのであります。融合統一のない分裂はないのであります。

人間も如何なる英雄、偉人でも単独ではお産ができませんので、どうしてもやっぱり「縁結び」といって男女が結ばれぬというとお産にはなりません。釈迦も講師も、キリストもみな結ばれて出来た人間であります。

その結び、即ちいろいろの力、生命、徳というものが組み合わさって、新しい力、生命、徳を生んでゆく。その創造を意味する所の「結び」に二種の作用がある。それが「高御産巢日（たかみむすび）」と「神産巢日（かみむすび）」であります』

破壊の武でなく創造の武になると、きっと相手（受け）は、「ある時期、私は不思議なことに気がついた。先生に近寄ったとたん、自分の心と体が何か透明な感じになる。そして先生に触れると、それはよりはっきりして、まるで自分と先生の心と体の境の区別が、無くなったような感じとなるのである。それは先生の修行で得られた、対峙を超えた心から生じる大きな気の力が、我々を包み込んだのであろう」（多田宏先生の感想）という気持ちになると思います。

天神楽（あめのかぐら）は「淡路之穂之狭別の行」とも呼ばれていました。大先生は、この時に「スーウウウユーム」と言霊を発しながら舞われたようです（[http://blog.goo.ne.jp/takemusu\\_001/e/a58814cef881d3cce9cbb77e4f9f7ad5](http://blog.goo.ne.jp/takemusu_001/e/a58814cef881d3cce9cbb77e4f9f7ad5) 参照）。

昭和42年(1967)4月9日に大先生の演武を拝見した時、最初に見せられた技が正面打ち入身投げでした。その時、大先生は、「スーウ〜ウ〜ウ〜ウ」と抑揚のある気合（言霊）を發せられ、360° 転換して相手を導かれてから投げられました。今になってみれば、「ムスビ」をお示しになられたのだと思います。

2017 年?月?日

#### 古事記 現代語譯 古事記 (16)

<以下はまだ文章化していません。ブログで順次発表しますが、残りの部分の要約を示します。>

淡道穂狭別島とは淡路の島は穂の狭別のような島であるということです。



稲穂（写真）

詳しく説明すると、一粒の稲の穂は芽を出し花を咲かし、実を付けます。それを繰り返すことによって千粒、万粒にも裂き別れさせます。淡路島もそれと同様で、最初に淡路島が存在しその後に裂き別れるように他の島々が出来ていった。

淡路島は全てのさきわけ的存在ということです。

これが淡道穂狭別島の言葉の意味です。

合気道では、「武産とは合気道の原理を研鑽することにより、無限の技が生まれてくるという、実技の問題である」（斉藤守弘）という「武産」と同じ意味です。それで、「天之武産合氣業」と書かれています。

大先生の『古事記』は『布斗麻邇古事記』で、「布斗麻邇（ふとまに）」は「言霊」のことなので、言霊

によって解いた古事記の営みが合気道であるということになります。

ここまでは、『霊界物語』を引用して説明してきましたが、「天の村雲九鬼さむはら龍王之御道」と書かれていることから、「天の村雲九鬼さむはら龍王」の神示を降ろした中西光雲・清雲夫妻について語らなければならないでしょう。

そして、中西光雲が言霊によって解いた意味を明らかにするのが分かりやすいと思います。

「納屋改造の小屋を『合気道の産屋』と考えた大先生には、三つの大きな構想があった。第一にはここに合気神社を建立すること。第二には野外道場を設けること。第三には持論の兵農（武農）一如の生活を実践することである。それらの全てを『合気苑』の名のもとに新たな開拓をすることが、岩間における大先生の最後の（当時としては、大先生はこの事業の達成をもって最後の人生の仕上げと決めていた）念願であり、その完成まではいかなる事態が生じようともくじけまいと、不屈の闘志をかきたてていた。合気神社の建立は、開祖にとって、いうならば「合気道を武産（たけむす）」し、守護しつづけてくださった四十三神（後述）への御礼」であった。その前後、開祖は、在野の古事記研究家の第一人者である言霊学者中西光雲と親しくいきさし、氏とのはなしを何よりの楽しみにしていた。開祖のいわゆる「武産合気」なる発想は、古事記によるところきわめて大なるものがあったように思う。

（中略）

私の手もとに秘蔵する修祓（しゅばつ、禊ぎ祓いして守護神の降霊を感得する神道の最重要なる儀式のひとつ）巻物によれば、光雲氏を先導の前座、秋山清雲氏を中座として、開祖はこの儀をおこなっている。昭和十五年十二月十四日のことである」（『合気道開祖 植芝盛平伝』p.262）。

「武産合気」は「たけむすあいき」と読む以外に「さむはら」とか「さむはら合気」と読んでいました。道文に「武産さむはらの合気」（『合気神髄』 p. 78）という言葉も見られるように「武産」と「さむはら」は同じ意味です。

この「さむはら」について中西光雲が次のように言霊による解を与えています。

「**さむはら** 「さむ」一開いて結ぶ、「はら」一孕（はら）んで結ぶ意。大自然を土台として、夫々の因と果に成り表はれる武の働きを謂ふ。

万有ならば、天地人の理合を先ず第一に知り（仏のことを天地人の“調合師”と謂ふ）この三玄（さんげん）の和に結びて科学する業（わざ）・力を云ふ（註 三玄：三つの奥深い道理、三元：三つの根本。三玄と三元は同じ意）。

電気を孕んだ雷が、電光石火の早業を以て偉大なる働きをする。是自然の気の「さむはら」である。又一粒の草種が季の節に合せて芽を出し、茎に応じて丈夫に根を張り、巡りに合はせて花を開き実を稔らせる。是を「さむはら」の武と云ふ」（中西光雲著『「ことたま」に依る 十種太祓（布留部祓）の解明』 p.242）

さむ＝覚める？＝本来の意識にもどる→開く（息を吐く）、はら＝孕む＝中に含む・膨らむ→息を吸う、という意味だと思いますが、この解から呼吸のことを言っていることが分かると思います。

「武産合気」が「呼吸力によって無限の技を生むことである」と分かったら、次は呼吸力の養成の時に自分の中心と宇宙の中心（皆空の中心、大虚空の中心）を意識して、そこに相手を吸収して、相手と一体・宇宙と一体（神人合一）となって動く稽古をすると良いと思います。

愛の念力、引力の練磨、宇宙の中心に帰一、帰一和合、神人合一、同根一体、和と統一（吸収して一体

となる)などの言葉は、これに関連しています。

『古事記』は、島生み（島々の生成）に続いて神生み（神々の生成）になります。

言霊百神という言葉がある程、たくさんの神々が生まれますが、神名の意味を最後に**付表**として載せておきますので参考にして下さい。

イザナギが黄泉の国を訪問した後、逃げ帰る時に桃の実を3個投げます。この桃の実は、古来、悪霊や邪鬼を払う霊力があるものと信じられていることと関係があります。

そして、イザナギが筑紫の日向（ひむか）の橘の小戸（小門、おど）の阿波岐原（あはぎはら）で禊をして身を净めます。

合気道のことを「禊技（小戸の神業、小門の神業）」というのはここから来ています。

誓約（うけい）というのは、「そうならばこうなる、そうでないならば、こうなる」とあらかじめ宣言を行い、そのどちらが起こるかによって、吉凶、正邪、成否などを判断する占いのことですが、合気道では「受霊（うけひ）」と書いて、結びのことを表しています。

この時に生れた（化生した）「正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命」が、合気道で言う「正勝・吾勝・勝速日」があります。

天の岩戸では、岩戸開きがありますが、合気道で言う「二度（目）の岩戸開き」は稽古によって体から熱や光が出るようになることを指しています。大先生は目から光が出ていました。技を掛けられている時にその光が出ていることが感じられました。

スサノオが八俣（やまた）の大蛇の尾から太刀を取り出しますが、草薙の剣、天の叢雲の剣とかスサノオの神剣と呼んでいます。この剣が両刃の剣であることから、霊体一致、祭政一致の意味で使われています。合気道そのものがスサノオの神剣の技であるということから、古い道歌では合気道（当時は合気武道か？）を指して剣の道と詠まれています。

大国主の命に逢うところでは、スサノオがスセリ姫と結婚をして、スセリ姫が夫のスサノオに蛇の比礼（領巾）と蜂の比礼を与えます。

比礼は、女性が、首に掛けて、結ばずに、左右から同じ長さで前に垂らすスカーフ様のもので、蛇や蜂（マムシや毒虫）除けの霊力があるものとされていました。

合気道では「魂（こん）の比礼振り」という言葉が使われています。



海幸（うみさち）と山幸（やまさち）の話で、潮の満ちる珠、潮の乾る珠が出て来ます。  
赤玉は塩盈珠（しおみつのたま）、白玉は塩涸珠（しおひるのたま）で、潮の満干を司る珠です。天の呼吸（日月の運行）によって誘起される潮の満干が地の呼吸になります。  
大先生は、「天の気は日月、地と結んで潮の干満、その玉をいだいて行うのが合気道であり、天の気は陰陽にして万有を生み出す」と話されています。

呼吸力によって、無限の技を生むということが、「魂の比礼振り」であり、「赤玉、白玉」という言葉で説明されています。

以上は八千代合気会の師範ブログからまとめました。

（文責： 八千代合気会 乾泰夫）

付表 1. 神名の意味

神名は『武産合氣』と『合気神髓』にあるものすべて網羅

| 神名                              | 意味                                                                                                                                                           |
|---------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 天津神、国津神<br>(アマツカミ、クニツカミ)        | 天津神は、高天原に居る神々、又は高天原から天降った神々。<br>国津神は、地に居た神々、又は天津神の須佐之男の神の子孫の<br>大国主命などで天津神の支配を受けた神々。                                                                         |
| 健御名方の神<br>(タケミナカタノカミ)           | 動物の本性（勇魂）<br>国譲りの際に反抗した神【古事記】                                                                                                                                |
| 大山咋の神<br>(オオヤマクイノカミ)            | 大地球の引力（智魂）<br>須佐之男の神の孫。大歳神（おおとしのかみ）の子。偉大な<br>山の境界の棒の意【古事記】                                                                                                   |
| 大床の神（又は大地の神。大常は誤植）<br>(オオトコノカミ) | 鉱物の本性（親魂）、万物の神、万物合力、凝力（固体）<br>大地のことを昔は大床・大地（おおとこ）といい、大床（大<br>地）主大神（おおとこぬしおおかみ）とは大国主大神のこと。                                                                    |
| 伊耶那岐の神<br>(イザナギノカミ)             | 伊耶那岐は、造化の結びの神（男神）、火。<br>「イザナギの命の御名義は、大本言霊即ち体より解釈する時<br>は、イは気なり、ザは誘ふなり、ナは双ことなり、ギは火に<br>して即ち日の神、陽神なり。」（霊界物語 10-2-27）<br>伊耶那美の神とともに島生み、国生みを行った男神、【古事記】          |
| 伊耶那美の神<br>(イザナミノカミ)             | 伊耶那美は、造化の結びの神（女神）、水。<br>「イザナミのミは水にして陰神なり、所謂気誘双神と云ふ御<br>名であつて、天地の陰陽双びて運り、人の息双びて出入の呼<br>吸をなす、故に呼吸は両神在すの宮である。」（霊界物語<br>10-2-27）<br>伊耶那岐の神とともに島生み、国生みを行った女神【古事記】 |

|                                                                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命<br/>(マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホミミノミコト)</p> <p>(読みは本居宣長による)</p> | <p>「正しく勝ち、吾に勝ち、それは一瞬の機の中に速やかに勝つ」という合気道の特質を表した神。すぐれたお方の義。</p> <p>「正勝は屈せぬこと、吾勝はたゆまぬこと、勝速日は勝利栄光をいう。」(開祖)</p> <p>「不撓不屈勝利栄光の神」(霊界物語 12-4-29)</p> <p>皇統の祖、邇々芸命の父【古事記】</p> <p>『古事記』では、天照大御神が須佐之男命に対し「高天原を我が物にせん」と邪心を抱いて来たものと、男装武装して迎えたが、須佐之男命は、誤解であることを弁明し、そのことを証明する為、互いに天の安河（あまのやすかわ）を挟んで誓約（うけひ）を交わし、子供を作る事を提案した。この誓約の中で、須佐之男命が天照大御神の左の角髪付いていた玉（八尺の勾玉の五百津の美須麻流ーいほつのみすまるーの珠）を貰い受け、それを噛んで吹き棄てた時に息吹の霧の中、男神が生じた。この男神が、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命である。この誓約の際、須佐之男命に依り、天照大御神の身に付けていた物から、五柱の男神が生じた。正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命は、最初の男神と記される。</p> <p>結局、須佐之男命が身に付けていた物から生じたのは、女神のみであった。その事が、邪心の無い何よりの証拠であるとして、須佐之男命は勝利宣言した。神名冠の「正勝吾勝」は、須佐之男命の勝利宣言に因む名で「正攻法で我が勝つ」と言う意味を表し、続く「勝速日」も「素早い勝利の神霊」という意味を表している。この事を合わせると「正攻法で戦い、素早い勝利で私が勝ち、神霊が出来た」と言う意味である。</p> <p>次の「天之」は、高天原に直接関係の在ると言う意味である。</p> <p>「忍」は、威力（生命力）のある者を美称する言葉。次は稲穂の神を表す「穂」。神霊の意味を表す語である「御」を重ねた尊称「御御＝みみ＝耳」から成る。これは「高天原に縁の在る威力（生命力）に満ち溢れた稲穂の神。」と言うこの神の性格を物語っている神名である。【古事記】</p> |
| <p>天の村雲九鬼さむはら竜王<br/>(アメノムラクモクキサムハラリュウオウ)</p>                            | <p>天地の祖神、速武産の大神、「主（ス）」の神の働きの現れ。世界最高の徳。天の叢雲九鬼さむはら竜王。</p> <p>氣（エネルギー）の根源神。</p> <p>「天の速武産の大神の御働きの現われは天の村雲九鬼さむはら竜王大神と呼ぶのである。」(開祖)</p> <p>武産合気の守護神。武産の根源の現れ。世界最高の徳。どんな魔も邪悪も一瞬にして浄め祓う神。</p> <p>「いかなる業（ごう）をも、一瞬にして浄めてしまう神様」(開祖)</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

|                                                            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>生産霊(イクムスビ)、</p> <p>足産霊(タルムスビ)、</p> <p>玉留産霊(タマツメムスビ)</p> | <p>三元（剛・柔・流）の神。剛（玉留産霊、□）、柔（足産霊、○）、流（生産霊、△）。</p> <p>合気道の技の三要素。</p> <p>天地剖判（天地創造）の際に造化三神が持っていた属性、力。</p> <p>「生産霊、足産霊、玉留産霊の三元がととのうと、宇宙全体の姿が出来上がるのである。」（開祖）</p> <p>「剛、柔、流の三物は是れ上帝の全体なり。而して流体を生魂と唱へ葦芽彦遅と称し、剛体を玉留魂と唱へ常立と称し、柔体を足魂と唱へ、豊雲野と称す。剛体は鉱物の本質なり、柔体は植物の本質なり、流体は動物の本質なり。」（霊界物語 13-0-3）</p> <p>生産霊は国土の万物の芽生え、発生、生成化育の力。足産霊は国土の万物の充足、充滿、豊穰の力。玉留産霊は鎮魂の神・遊離魂の鎮静。</p> <p>『延喜式』に見える、宮中八神の三神。</p>                                                       |
| <p>須佐之男の神</p> <p>(スサノオノカミ)</p>                             | <p>気の修行。力の大王。武道の大王。武速須佐之男の神。</p> <p>「いやはてに陰陽の火水を放ち給ひて、豊国姫の身魂を神格化して神素盞鳴尊と名づけ、大海原の司に任じ給ふ。豊国姫命より神格化せる神素盞鳴尊の又の御名を本巻にては国大立命といふ。国大立命は四魂を分ちて、月照彦神、足真彦神、少彦名神、弘子彦神となり、現、神、幽の三界に跨りて神業に参加し給ひつつあることは前巻既に述べたる所なり。」（霊界物語 10-1-26）</p> <p>「天照大御神を変性男子と申し、厳の御魂と申し、須佐之男命は姿は男であつても女の霊をおもちであつたから変性女子と謂ひ瑞の御魂といふので御座います。」（霊界物語 12-4-29）</p> <p>黄泉国（よみのくに）から帰った伊耶那岐の神が褌被えをした折に化生した三貴子の中の一柱。須佐は進む、荒ぶのスサで、この神に関する神話はすべてに勝ち、荒んで荒々しい振舞いをされる話が多く、そのために付加された神名か。【古事記】</p> |
| <p>意富加牟豆美神</p> <p>(オオカムヅビノカミ)</p>                          | <p>桃の実（悪疫邪気を祓う神聖な実）。</p> <p>「立派な世を組織するために、国をつくるために、大和の魂の気の錬成である。」（開祖）</p> <p>「『吾は神伊邪那諾命、日の出神をして黄泉軍を言向け和さしめたれども、魔軍の勢強くして容易にこれを帰順せしむ可からず。諸神将卒は戦ひに勞れ艱みたる折しも、汝松、竹、梅の桃の実現れ来りて魔軍を言向け和し吾神軍を救ひたるは、この戦ひに於ける第一の功名なり。これより松、竹、梅の桃の実は、吾軍を助けたる如く、世人の悪魔に悩まされ、憂瀬に落ちて苦しまむ者あらば、汝が言霊を以てこれを救へよ。</p>                                                                                                                                                               |

|                                             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|---------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                             | <p>汝ら三柱に対して、意富加牟豆といふ御名を賜ふ』と宣らせ給ひぬ。」（霊界物語 10-1-21）</p> <p>黄泉国（よみのくに）の神々の一柱。桃の実の化神。イザナギが、黄泉国から追い掛けて来た黄泉醜女（よもつしこめ）を追い払う時に投げた桃の実。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                                              |
| <p>速武産の大神<br/>(ハヤタケムスノオオカミ)</p>             | <p>天地の祖神、武産合気の守護神。亦の名を大天主太神、「主（ス）」の神。</p> <p>「天の速武産の大神の御働きの現われは天の村雲九鬼さむはら竜王大神と呼ぶのである。」（開祖）</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <p>猿田毘古の大神<br/>(サルタヒコノオオカミ)</p>             | <p>案内者、先導者。</p> <p>「悪を去り善に導き此世に幸はいを与へ玉ふは、猿田彦の命にして天の鈿女（あめのうずめ）の命の夫なり。」（神の国 道の栞第一巻下（一））</p> <p>天孫降臨の時に道案内をした国津神（くにつかみ）。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <p>大天主太神<br/>(モトツミオヤスメオオカミ)</p>             | <p>天地の祖神、至大天球の司宰（つかさ）、亦の名を速武産の大神、「主（ス）」の神、皇大神（すめおおかみ）。</p> <p>合気道の守護神。この大神の御働きが武産。</p> <p>言霊【ひと（一霊四魂）、ふた（八力）、み（三元）、よ（世）、いつ（出）、むゆ（燃）、なな（地成）、弥（や）、凝（この）、足（たり）、諸（もも）、血（ち）、夜出（よろづ）】の大元霊。</p>                                                                                                                                                                                            |
| <p>高御産巢日(タカミムスビ)、<br/><br/>神御産巢日(カミムスビ)</p> | <p>霊系（高御産巢日）、体系（神御産巢日）の祖神。</p> <p>造化三神の中の二柱。高御産巢日神は宇宙の生成力を神格化したもの、神御産巢日神は生成力の霊妙な働きを高御産巢日神と並べて二元的に神格化したもの。生成力は二元的なものによってなされるという、上代の人々の思想によって生まれた神であろう。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                      |
| <p>国常立神<br/>(クニノトコタチノカミ)</p>                | <p>ア声。国祖主神（女神）。吾勝。国底主の神。</p> <p>天地修理固成の折りの名。</p> <p>「実際の御経綸が分つてこなくては、空前絶後の大神業に完全に奉仕することはできるものではない。御神諭に身魂の樹替樹直しといふことがある。ミタマといへば、靈魂のみのことと思つてゐる人が沢山にあるらしい。身は身体、または物質界を指し、魂とは靈魂、心性、神界等を指したまうたのである。すべて宇宙は霊が本で、体が末となつてゐる。身の方面、物質的現界の改造を断行されるのは国祖大国常立神であり、精神界、神霊界の改造を断行したまふのは、豊国主神の神権である。ゆゑに宇宙一切は霊界が主であり、現界が従であるから、これを称して霊主体従といふのである。」（霊界物語 01-0-3）</p> <p>神世七代の第一代の神。国は天に対する地の意味で、浮脂の</p> |

|                                                        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                        | <p>如く漂う中に残って地となったものの神格化、すなわち国土の限りを知ろしめす神。【記紀】</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| <p>豊雲野神<br/>(トヨクモノノカミ)</p>                             | <p>才声。亦の名を国狭土神。正勝。<br/>神世七代の神の一柱。大地創成の初めのころ、浮脂の如く漂っていたものが、次第に固まる状態を表したものの。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| <p>天御中主神<br/>(アメノミナカヌシノカミ)<br/>{御中主神(ミナカヌシノカミ) }</p>   | <p>ポチ（天地創造の言霊・気の働き）、「主（ス）」の神の働きがあって生まれた造化三神の中の一柱。時として、「主（ス）」の神。<br/>『幽の幽神』と申しますのは、無限絶対、無始無終の宇宙の大元霊、大妙体の事でありまして、皇典古事記には、天御中主神と奉称し、並びて高皇産霊、神皇産霊の二霊を合一し、三神即一神の幽神であります。古典に、独神而隠身也とあります。即ち独一真神、宇宙の大本元であります。・・・故に此大神は至真、至善、至美、円満具足の神の意義であります。世界一般に通じて神と申すのは、無声無形の幽の幽にます神様をさすのであります。」（出口王仁三郎全集 第1巻）<br/>「霊、力、体合一したるを上帝と曰ふ。真神と謂ふも上帝と曰ふも皆天之御中主大神の別称なり、左図を見て知る可し。全智全能乃真神」（霊界物語 13-0-3）<br/>造化三神の一柱。高天原の主宰神であり、天の中央に坐しする宇宙の根元神である。観念的な神であるといえよう。【古事記】</p> |
| <p>宇比地爾神(ウヒヂニノカミ)、<br/><br/>須比智爾神(スヒヂニノカミ)</p>         | <p>ウ声（宇比地爾神）、ス声（須比智爾神）。<br/>「解力...宇比地根神 凝力...須比地根神」（霊界物語 13-0-3）<br/>宇比地爾神（男神）は、須比智爾神（女神）と相並んで生まれた神。宇は泥（うき）、須は砂で、大地が泥や砂でやや形をなした状態を表す。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| <p>角杙神(ツヌグイノカミ)、<br/><br/>活杙神(イクグイノカミ)</p>             | <p>エ声（角杙神）、レ声（活杙神）。<br/>「弛力...角久比神 引力...活久比神」（霊界物語 13-0-3）<br/>神世七代の第四の偶生神。生成繁殖の神。泥土が段々固まって生物が生成し、はぐくみ育てる力を得たことを表現する神名。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| <p>意富斗能地神<br/>(オオトノヂノカミ)、<br/><br/>大斗乃弁神(オオトノベノカミ)</p> | <p>イ声（意富斗能地神）、ギ声（大斗乃弁神）。<br/>「動力...大戸乃地神 静力...大戸乃辺神」（霊界物語 13-0-3）<br/>神世七代の第五の男神が意富斗能地神、女神が大斗乃弁神で、偶生神となる。この二神は、大地が完全に凝固した時を神格化したもの。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| <p>面足神(オモダルノカミ)、</p>                                   | <p>五大声音成立の全面を称している。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |

|                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 阿夜可志古泥神<br>(アヤカシコネノカミ)                               | 「合力...面足神 分力...惶根神」(霊界物語 13-0-3)<br>神世七代の第六代の偶生神。面足神は、大地の表面が完成した意味。阿夜可志古泥神は、いよいよ大地が成り立ち、あやにかしこしと美称したもの。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                             |
| 天照大御神<br>(アマテラスオオミカミ)                                | 「太陽界の主宰となし給ふ。」(霊界物語 10-1-26)<br>「天照大御神を変性男子と申し、蔽の御魂と申し、須佐之男命は姿は男であつても女の霊をおもちであつたから変性女子と謂ひ瑞の御魂といふので御座います。」(霊界物語 12-4-29)<br>黄泉国(よみのくに)から帰った伊耶那岐の神が禊祓えをした折に化生した三貴子の中の一柱。日の神・太陽神としての神格を持つ。【古事記】                                                                                                                                                             |
| 衝立船戸神<br>(ツキタツフナドノカミ)<br>～<br>辺津甲斐弁羅神<br>(ヘツカイベラノカミ) | 宇宙大修祓の端緒を開き給うた大神業。<br>衝立船戸神は、「神の御力添へをする役目」(霊界物語 10-2-27)<br>辺津甲斐弁羅神は、「従前の方針を変革する事」(霊界物語 10-2-27)<br>「船戸神より以下辺津甲斐弁羅神以前、十二神は身に着ける物を脱ぎ棄て玉ひしに由りて生りませる神なり」 右の十二神は、黄泉国如す醜穢き国と化り果てたるを、大神の大英断に由りて、大々的改革を実行され、以て宇宙大修祓の端緒を開き給うた大神業であります。」(霊界物語 10-2-28)<br>黄泉国(よみのくに)から帰った伊耶那岐の神が禊祓えをしたおりに、身に着けたものを次々と投げ出すと、それらから十二の神々が化生した。一番目に投げた杖から化生した神が衝立船戸神。最後が辺津甲斐弁羅神。【古事記】 |
| 月読大御神<br>(ツクヨミノオオミカミ)                                | 「太陰界の主宰となし給ひ」(霊界物語 10-1-26)<br>黄泉国(よみのくに)から帰った伊耶那岐の神が禊祓えをした折に化生した三貴子の中の一柱。月と海の潮の干満との結びつきから月に対する信仰を表したもの。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                            |
| 大宜都比売(オオゲツヒメ)                                        | 「体主霊従の頂上に達したることを大気津姫といふ」(霊界物語 11-3-15)<br>伊耶那岐、伊耶那美の二神の御子で、五穀の主宰神。古事記では須佐之男の神に、日本書紀では月読神に殺され、死体から粟・稗・麦・大豆・蚕などが化生した。【記紀】                                                                                                                                                                                                                                  |
| 木花毘売の神(コノハナヒメノカミ)<br>{木花佐久夜毘売(コノハナサクヤヒメ)}            | 和合達成の神ならいの御神意。伊都能売。<br>「木の花姫神、日の出神をして、伊豆能売神に任じ給ひぬ。」(霊界物語 10-1-26)<br>大山祇神(おおやまづみのかみ)の御女。絶世の美人で、天孫邇々芸命と婚姻。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                           |
| 日子番能邇々芸命<br>(ヒコホノニギノミコト)                             | 天照大御神の孫(天孫)、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命の子。天孫降臨した神。木花佐久夜毘売と結婚した神。                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |

|                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                | 歴代天皇の祖先神。木花佐久夜毘売と結婚し、日子穗々出見命など三御子が生まれた。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 日子穗々出見命<br>(ヒコホホデミノミコト)                        | 山幸彦<br>邇々芸命の御子（末弟）。海神（わだつみ）の娘・豊玉毘売と婚姻し、海神から塩盈珠・塩涸珠を授けられる。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 豊玉毘売(トヨタマヒメ)                                   | 赤玉にして塩盈珠（しおみつのたま）。<br>海神（わだつみ）の娘で日子穗々出見命と結婚。神名は容顔の美しい女性。鵜葺草葺不合命を生む。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命<br>(アマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト) | 日子穗々出見命と豊玉毘売の子。<br>日子穗々出見命と豊玉毘売命との間に生まれた御子で、神武天皇の父神。豊玉毘売命の妹・玉依毘売命に育てられ、後に姨（みおば）玉依毘売命と結婚して、神武天皇など四柱の神を生んだ。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 玉依毘売(タマヨリヒメ)                                   | 白玉にして塩涸珠（しおひるのたま）。<br>海神（わだつみ）の娘、鵜葺草葺不合命の妻、神武天皇を生んだ。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 神倭伊波礼毘古命<br>(カムヤマトイワレビコノミコト)                   | 神武天皇<br>第一代の天皇。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 伊豆能売(イズノメ)<br>{伊都能売（イズノメ）}                     | <p>厳瑞(いずみず、陽と陰)合一した至靈魂。ミロクノ大神<br/>体主靈従（われよし、強い者勝ち）の世を、もとの靈主体従（ひのもと、靈の本）の世に切り替える働き。</p> <p>「吾々大本人の唱導する、伊都能売の御魂とは、如何なる神格を具有する神であるかと云ふに、古来仏教家の間に唱へて来た、観音に等しきものである。神道にては、木の花姫命と称へて居る神の事である。</p> <p>厳の御魂、瑞の御魂の神も、亦た伊都能売神の分身的活現であります。</p> <p>厳の御魂五柱、瑞の御魂三柱（又は五柱）活動力を総称して、伊都能売の御魂と奉称するのである。</p> <p>或る時は天神となり、地神と現じ、八百萬の天使と変じ、千変萬化五六七（みろく）の活動を為し玉ひ、宇内を光被し、開発し、整理し、天国靈国に日月神と化現し玉ふは、皆伊都能売神の大神格の活動である。」（神の国 伊豆能売）</p> <p>黄泉国（よみのくに）から帰った伊耶那岐の神が禊祓えをした折に化生した神々の一柱で、伊豆は厳？＜分の下に瓦＞（いつべ）などの厳（いつ）で、齋み清める意味。【古事記】</p> |
| 上津綿津見神<br>(ウツツワタツミノカミ)、                        | <p>顕幽神三界を表す神。</p> <p>「邪神は常に正神を圧迫し誑惑し、邪道に陥れむと昼夜間断なく隙を窺ひつつあるものにして、第三段の身魂の垢を洗は</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

|                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>中津綿津見神<br/>(ナカツワタツミノカミ)、</p> <p>底津綿津見神<br/>(ソコツワタツミノカミ)</p>                              | <p>むが為に、底津綿津見神、底筒之男神を任じ給ひ、第二段の身魂を洗ひ清むる為に、中津綿津見神、中筒之男神を任じ給ひ、第一段の身魂を洗ひ清むる為に、上津綿津見神、上筒之男神を任じ給へり。何れも瑞（みず）の御魂の活動にして、大和田原の汐となりて世界を還り、雨となり、雪となりて、物質界の穢れをも洗ひ清め生気を与ふる御職掌なり。」（靈界物語 10-1-26）</p> <p>黄泉国（よみのくに）から帰った伊耶那岐の神が禊祓えをした折に化生した海神（わたつみのかみ）。水底で滌ぎ給うた時に底津綿津見神が、中程で滌ぎ給うた時に中津綿津見神が、水の上で滌ぎ給うた時に上津綿津見神が化生した。【古事記】</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| <p>上筒之男命<br/>(ウワツツノオノミコト)、</p> <p>中筒之男命<br/>(ナカツツノオノミコト)、</p> <p>底筒之男命<br/>(ソコツツノオノミコト)</p> | <p>顕幽神三界を表す神。</p> <p>「ツツノオの言霊は、大金剛力を具有し、以て正邪理非を決断し、水の元質を発揮して、一切の悪事を洗ひ清め、霊主体従日本魂の身魂に、復帰せしめ玉ふてふ神名であります。茲に底中上の神と命とが区別して載せられて在るのは、大に意味のある事である。古典は霊を称して神と言ひ、体を称して命と言ふ。神とは幽体、隠身、即ちカミであつて、命とは体異、体別、即ち身殊の意味である。後世の古学を研究するもの、無智蒙昧にして、古義を知らずに神と命を混用し、幽顕を同称するが故に、古典の真義は何時まで研究しても、分つて来ないのであります。又底とは最も下級の神界及び社会であり、中とは中流の神界及び社会であり、上とは上流の神界及び社会を指すのである。故に綿津見神は底中上の三段に分れて、神界の大革正を断行し玉ひ、筒之男命は、同じく三段に分れて、現社会の大革正を断行し玉ふ御神事であります。大本神諭に『神の世と人の世との立替立直しを致すぞよ』とあり、亦『神、仏儒人民なぞの身魂の建替建直しを致す時節が参りたから、良の金神大国常立尊が、出口の神と現れて、天の御三体の大神の御命令通りに、大洗濯大掃除を致して、松の世五六七（みろく）の結構な世にして上中下三段の身魂が揃うて、三千世界を神国に致すぞよ』と示されてあるのも、斯の三柱の神と、命との御活動に外ならぬのであります。」（靈界物語 10-2-30）</p> <p>「上津綿津見神、中津綿津見神、底津綿津見神」の項、靈界物語 10-1-26 参照。</p> <p>黄泉国（よみのくに）から帰った伊耶那岐の神が禊祓えをした折に化生した船魂の神。水底で滌ぎ給うた時に底筒之男命が、中程で滌ぎ給うた時に中筒之男命が、水の上で滌ぎ給うた時に上筒之男命が化生した。【古事記】</p> |
| <p>建御雷の大神</p>                                                                               | <p>伊耶那美の神の死後、伊耶那岐の神のみから生まれた神々の</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |

|                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (タケミカズチノオオカミ)           | 一柱。天孫降臨に先立ち、経津主の大神とともに出雲に赴き、国譲りの大業を成就させた神。春日大社、鹿島神宮の祭神。<br>【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 経津主の大神<br>(フツヌシノオオカミ)   | 古事記では、建御雷の大神と同神らしく書かれている。日本書紀では、建御雷の大神とともに出雲に赴き、国譲りの大業を成就させた神。香取神宮の祭神。【記紀】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 道之長乳齒神<br>(ミチノナガチハノカミ)  | 禊の神。<br>「道の長乳齒の意義は、天理人道を説く宗教家、教育家、倫理学者、敬神尊皇愛国を唱ふる神道家、皇道宣伝者、演説説教家等の大家と曰ふ事である。この帯を投棄て給ふと云ふ事は、総ての教育、宗教、倫理の学説を根本より革正し給ふと曰ふ事であります。」（霊界物語 10-2-27）<br>黄泉国（よみのくに）から帰った伊耶那岐の神が禊祓えをした折に、投げたものから化生した十二の神々の一柱。道中の安全を守る神。【古事記】                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 高良玉垂の神<br>(コウラタマタレカミ)   | 日子穗々出見命（山幸彦）。<br>塩盈珠（しおみつたま）・塩干珠（しおひるたま）を使う神。<br>高良は天孫を、玉は言霊を、垂は治めるの意。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 祓戸四柱の神<br>(ハライドヨハシラノカミ) | 瀬織津比売（せおりつひめ）、速佐須良比売（はやさすらひめ）、速開都比売（はやあきつひめ）、気吹戸主（いぶきどぬし）の祓いを司る四柱の神。<br>「天上よりこの光景を眺めたる、大国治立命（おおくにはるたちのみこと）の左守神なる高皇産霊神、右守神なる神皇産霊神は、我が精霊たる撞の大御神、神伊弉諾の大神、神伊弉冊の大神に天の瓊矛を受け黄金橋なる天の浮橋に立たしめ玉ひて、海月の如く漂ひ騒ぐ滄溟を、潮許袁呂許袁呂に掻き鳴し玉ひ、日の大神の気吹によりて、宇宙に清鮮の息を起し、地上一切を乾燥し玉ひ、総ての汚穢塵埃を払ひ退けしめ玉ひぬ。この息よりなりませる神を伊吹戸主神と云ふ。<br>而して地上一面に泥に塗れたる草木の衣を脱がしめむため風を起し、風に雨を添へて清めたまひぬ。この水火より現はれたまへる神を速秋津比売神と云ふ。再び山々の間に河川を通じ、一切の汚物を神退ひに退ひ給ふ。この御息を瀬織津比売神と云ふ。瀬織津比売神は、地上の各地より大海原に、総ての汚れを持ち去り、之を地底の国に持佐須良比失ふ、この御息を速佐須良比売神と云ふ。以上四柱の神を祓戸神と称し、宇宙一切の新陳代謝の神界の大機関となしたまふ。この機関によつて、太陽、大地、太陰、列星、及び人類動植物に至るまで完全に呼吸し、且つ新陳代謝の機能全く完備して、各其の生活を完全ならしめ給へり。この神業を九山八海の火燃輝 |

|                                                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                 | <p>のアオウエイの、緒所（臍）の青木原に御禊祓ひたまふと云ふなり。」（霊界物語 06-4-19）</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| みかえる、身変(ミカエル)                                   | <p>「どんな形にも身を変えて衆生を済度する観世音菩薩、最勝妙如来のよう」（開祖）な神。</p> <p>顕幽神三界を立て替える神。</p> <p>『『ミカエル』とは天地人、現幽神の三大界即ち三を立替る神人の意味なり。詳しく云へば、現幽神三つの世界を根本的に立替る神人、といふ意味なり。」（霊界物語 06-5-28）</p> <p>キリスト教の天使長ミカエルが由来。</p>                                                                                                                                                                                                                  |
| <p>良金神(ウシトラノコンジン)</p> <p>{丑寅の金神(ウシトラノコンジン)}</p> | <p>国祖、国常立神。</p> <p>「茲に良の金神国常立尊は、山脈十字形をなせる地球の中心蓮華台上に登られ、四方の国型を見そなはし、天に向つて神言を奏上し、頭上の冠を握り、これに神気をこめて海上に投げ遣りたまうた。」（霊界物語 01-4-35）</p> <p>「世を始め、世を固め、良を刺す至清至純の金剛力をもつた神様が良の金神様である。」（神の国）</p> <p>大本教の神。大本教は、1892 年に出口なおという女性に「良の金神」が憑依して成立した新興宗教。その教義によると、良の金神というのはもともと祟りをなす大悪神とされていたが実はそうではなく、太古、地上を支配していた国常立神のことであるという。邪神にその地位を奪われ、東北（丑寅）、つまり鬼門に封じられていたのを、時節がめぐり、ついにその時が来て、「世の中の立て替え、立て直し」をするために出口なお に憑依したという。</p> |
| 主の神(スノカミ)                                       | 一元の神、大天主太神。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| <p>国底主の神</p> <p>(クニソコヌシカミ)</p>                  | 国常立神。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| <p>国狭土神</p> <p>(クニノサヅチノカミ)</p>                  | 豊雲野神。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| ミロクノ大神(オオカミ)                                    | 五六七（ミロク）の大神、天御中主神。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 八大力王(ハチダイリキオウ)                                  | 対照力（動静、解凝、引弛、分合）の神、国常立神。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| ヒルコ                                             | 蛭子。不完全を表す。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 綿津見の神(ワタツミノカミ)                                  | 豊玉毘売、玉依毘売の父。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| <p>坤の大御神</p> <p>(ヒツジサルノオオミカミ)</p>               | 豊雲野神。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |

五絆緒(イツトモノオ)

五つの魂の緒。

## 付表 2. 合気神社に祀られている 43 神（推定）

総称は「合気大神（あいきのおおかみ）」

合気道の理念や技の働きと結びついている神々（黄色でマークした神は合気神社由来記にある神）

| No. | 神名                          | 古事記の神名                      | 働き等                                                                                   |
|-----|-----------------------------|-----------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | 須佐之男大神<br>(氷川神社)            | 建速須佐之男命                     | 建速須佐之男命と同、主の神、◎（ス）の御親、気の神、<br>気の動きそのもの、気の修行、力の大王、武道の大王、草薙<br>薙の神剣の発動                  |
| 2   | 武甕槌大神<br>(鹿島神宮)             | 建御雷神                        | 武の神（葦原中国平定による【古事記】）                                                                   |
| 3   | 経津主大神<br>(香取神宮)             | 「日本書紀」にの<br>み登場、経津主神        | 武の神（武甕槌〈建御雷〉の十掬剣の御魂、葦原中国平定<br>による【日本書紀】）                                              |
| 4   | 天の村雲九鬼さ<br>むはら龍王            |                             | 合気道の守護神、草薙の神剣の魂、速武産の大神の働きの<br>現われ、武産の根源の現われ、世界最高の徳、気の神、御<br>名の中に合気の技が含まれている、一瞬にして浄める神 |
| 5   | 猿田彦大神                       | 猿田毘古大神                      | 案内者・先導者、天の村雲九鬼さむはら龍王の使いとして<br>武産合気も命（みこと）を伝えた国津神                                      |
| 6   | 速武産の大神                      |                             | 天の村雲九鬼さむはら龍王の神界での名、気の動き、大天<br>主太神（#8）の働き（武産）を表す名                                      |
| 7   | 家津美御子大神<br>(けつみみこの<br>おおかみ) |                             | 熊野本宮大社の祭神、家都美御子大神：素蓋鳴大神（#1）、<br>開祖は熊野本宮大社の申し子                                         |
| 8   | 大天主太神（もと<br>つみおやすめお<br>ほかみ) |                             | この神の愛の働きが武産、天の村雲九鬼さむはら龍王<br>（#4）。天地の祖神、至大天球の司宰、主の神をはじめ正<br>しい神々の総称、宇宙の源・天之御中主大神（大本）   |
| 9   | 天御中主神・高御<br>産巢日神・神産巢<br>日神  | 天之御中主神・高<br>御産巢日神・神産<br>巢日神 | 中心の神、祖親神（みおやのかみ）、主の神（#1）と右旋・<br>左旋して摩擦連行作用を生じる神。高御産巢日神は霊系・<br>神産巢日神は体系の神              |
| 10  | 国常立神                        | 国之常立神                       | 右足（体的）、右の動き、受ける、女神、吾勝、顕幽一如<br>の（腹中に吸収する）引力の働き、ア声、亦の名を国底主<br>の神。良の金神（厳の御魂）国祖主神（女神）。    |
| 11  | 豊雲野神                        | 豊雲野神                        | 左足（霊的）、左の動き、発する、男神、正勝、オ声、亦<br>の名を国狭土神。坤の金神（瑞の御魂）                                      |
| 12  | 宇比地爾神・須比<br>智爾神             | 宇比地爾神・須比<br>智爾神             | 解力…宇比地爾神、ウ声。凝力…須比地爾神、ス声。<br>解力・凝力（大本）                                                 |
| 13  | 角杙神・活杙神                     | 角杙神・活杙神                     | 弛力…角杙神、エ声。引力…活杙神、レ声。<br>弛力・引力(大本)                                                     |
| 14  | 意富斗能地神・大<br>斗乃弁神            | 意富斗能地神・大<br>斗乃弁神            | 動力…意富斗能地神、イ声。静力…大斗乃弁神、ギ声。<br>動力・静力（大本）                                                |

|    |                      |                         |                                                             |
|----|----------------------|-------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 15 | 面足神、阿夜可志古泥神          | 於母弥流神、阿夜訶志古泥神           | 合力…面足神、分力…阿夜可志古泥神。<br>合力・分力（大本）                             |
| 16 | 伊耶那岐の神・伊耶那美神         | 伊耶那岐神・伊耶那美神             | 結びの神（岐美の神業）、修理固成の神、鳥生み・神生み → 結びによって武を産む神、更に、伊耶那岐…禊の神（小戸の神業） |
| 17 | 綿津見の神                | 綿津見大神、大綿津見神             | 赤玉・白玉・青玉（真澄の玉）使って行う合気のご神行（豊玉毘売、玉依毘売の父【古事記】）                 |
| 18 | 祓戸（はらいど）四柱の神         | 「古事記」には「速秋津比売神」のみ。延喜式の神 | 世を潔める神、技が磨かれ完成させる神、瀬織津比売・速佐須良比売・速開都比売・気吹戸主                  |
| 19 | 稚産霊命（わくむすびのみこと）      | 和久産巢日神                  | 真空の気と空の気の結びの神、和と統一に結ぶ神。                                     |
| 20 | 意富加牟豆美神（おおかむづびのかみ）   | 意富加牟豆美命                 | 地上天国（立派な世）建設のための大和魂の気（万有愛護の大精神）の養成、悪疫邪気を祓う神聖な実、桃の実          |
| 21 | 衝立船戸神 ～ 辺津甲斐弁羅神      | 衝立船戸神 ～ 辺津甲斐弁羅神         | 禊を司る十二神。宇宙大修祓の端緒を開き給うた大神業（大本）                               |
| 22 | 道之長乳齒神               | 道之長乳齒神                  | 禊の神、衝立船戸神 ～ 辺津甲斐弁羅神の一柱                                      |
| 23 | 伊都能売命                | 伊豆能売                    | 厳瑞合一した至靈魂、この世を禊ぐ神、水火（イキ）を整え 陰陽（厳瑞、相手と自分、人と神）の気を結ぶ神          |
| 24 | 上津綿津見神・中津綿津見神・底津綿津見神 | 上津綿津見神・中津綿津見神・底津綿津見神    | 顕幽神三界を禊ぐ神（三段禊）                                              |
| 25 | 上筒之男命・中筒之男命・底筒之男命    | 上筒之男命・中筒之男命・底筒之男命       | 顕幽神三界を禊ぐ神（三段禊）                                              |
| 26 | 天照大御神                | 天照大御神                   | 一元の極智、極みいず、極徳、極善の精神の動き。厳の御魂（大本、瑞の御霊は神素盞鳴大神 #1）              |
| 27 | 月読大御神                | 月読命                     | 太陰界の主宰、地のミロクの御霊性、神素盞鳴命 #1（大本）                               |
| 28 | 正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命        | 正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命           | 「正（まさ）しく勝ち、吾に勝ち、それは一瞬の機のうち<br>に速やかに勝つ」という合気道の特質を表した神（植芝盛平伝） |
| 29 | 手力男命                 | 天手力男命                   | 二度目の岩戸開き（魄を魂にふりかえ、体から熱と光が出るようになる）を司る神（天の岩戸開きの神【古事記】）        |
| 30 | 大山咋神（おおやまくいのかみ）      | 大山咋神                    | 引力の別称、大地球の引力、智魂                                             |
| 31 | 健御名方の神               | 建御名方神                   | 気育、流れ、動力の別称、動物の本性、勇魂                                        |
| 32 | 大床（大地）の神             | 大国主神のこと                 | 凝力、万物合力の別称、鉦物の本性、固体、親魂                                      |
| 33 | 高良玉垂の神               | 記紀にはない神、「日本紀略」にみ        | 塩盈珠（しおみつたま）・塩涸珠（しおひるたま）を使う神。日子穂々出見命（山幸彦）                    |

|    |              |             |                                                                                  |
|----|--------------|-------------|----------------------------------------------------------------------------------|
|    |              | える          |                                                                                  |
| 34 | 豊玉毘売・玉依毘売    | 豊玉毘売命・玉依毘売命 | 赤玉、塩盈珠・白玉、塩涸珠。地の呼吸を表す。水火（イキ）の神。天の呼吸（日月の運行）によって地の呼吸が起ることを摩擦連行作用                   |
| 35 | 木花佐久夜毘売      | 木花佐久夜毘売     | 和合達成の神                                                                           |
| 36 | 生産霊・足産霊・玉留産霊 | 宮中八神の三柱     | 三元（△○□）の神、合気道の動きを表す神、△（生産霊、気・流、動物の本性）・○（足産霊、柔、植物の本性）・□（玉留産霊、剛、鉱物の本性）を表す神         |
| 37 | 八大力王         |             | 対照力の神（対照力：互いに結び合って新しいものを産み出す相反する力、動静、解凝、引弛、分合）                                   |
| 38 | 国津竜王         |             | 気の神と推定 ← 八大竜王とは別の国津神である竜王、竜宮に住む神が竜王・竜神で、竜宮の宝は満干の珠（風雨電雷を叱咤し、自由に駆使する神器）であることから     |
| 39 | 九頭竜大権現       |             | 気の神と推定 ← 水を司る神で、また、運気を向上させ流れを作ることから                                              |
| 40 | 竜王           |             | 八大竜王（難陀竜王 跋難陀竜王 娑伽羅竜王 和修吉竜王 徳叉迦竜王 阿那婆達多竜王 摩那斯竜王 優鉢羅竜王）と推定                        |
| 41 | 大権現          |             | 熊野十二社権現（阿弥陀如来 薬師如来 普賢菩薩 如意輪観音 十一面観音 不動明王 千手観音 釈迦如来 龍樹菩薩 文殊菩薩 地蔵菩薩 毘沙門天 熊野大権現）と推定 |
| 42 | 大天狗          |             | 愛宕神社の十三天狗（平田篤胤『仙境異聞』）と推定                                                         |
| 43 | 大菩薩          |             | 観世音菩薩（身変〈みかえる〉、最勝妙如来ともいう）と推定。弥勒下生してミロクの大神となった弥勒菩薩も考えられる                          |